広島市の文化財　第35集

広島市佐伯区五日市町所在

池田城跡発掘調査報告

1986. 3

広島市教育委員会

はしがき

広島市の西部に位置する佐伯区は，古代から畿内と九州を結ぶ古代山陽道が通っており，交通上重要な役割を果たしておりました。中世山城も，この古代山陽道沿いの丘陵上に多く築かれており，池田城跡も，山陽道沿いに築かれた山城の一つであります。

このたび，土地区画整理事業に伴い，用地内に存在するこの池田城跡について，広島市教育委員会が発掘調査を行い，記録保存することといたしました。その結果，多くの遺構，遺物を発見することができました。この地域は，中世においては厳島神社領と安芸国守護武田氏の所領との接点として，争奪をくり返したところであります。調査の結果からは，池田城跡は，この争奪戦の中で重要な位置を占める山城であることが推定されます。さらに，発見した遺物の中には，輸入陶磁器類，国産陶磁器類があり，広い地域との交流をうかがうことができ，当時の武士階級の生活を考えるうえでも貴重な資料を得ることができました。

終りに，本調査にあたり，ご指導，ご援助をいただいた関係者の方々に厚くお礼申しあげるとともに，この報告書が，郷土の歴史研究や理解をすすめるうえで役立つことができれば幸いに存じます。

昭和61年３月

広島市教育長　藤井　尚

例　　言

1．本書は，広島市佐伯区五日市町大字五日市字城山における土地区画整理事業に伴い，昭和60年７月15日から10月31日までの間実施した，池田城跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，五日市町城山土地区画整理組合から委託を受けて広島市教育委員会が実施した。

3．本書はⅠ，Ⅲ，Ⅳを奥田泰将が，Ⅱ，Ⅴを中村眞哉が執筆した。

4．トレースは，幸田　淳，岡野幸夫，宇野孝子が行った。

5．本書掲載の航空写真は，スタジオ・ユニに委託した。

6．第１図は，建設省国土地理院発行の50,000分の１，広島の地形図を複製したものである。

目　　次

Ⅰ　はじめに …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 3
Ⅲ　遺　　構 …… 7
Ⅳ　遺　　物 …… 27
Ⅴ　ま　と　め …… 51

挿図目次

第１図　池田城跡の位置と周辺の主要遺跡 …… 2
第２図　池田城跡周辺地形図 …… 4
第３図　池田城跡地形測量図及び遺構配置図 …… 6
第４図　池田城跡断面実測図 …… 7
第５図　第１郭・第２郭・第３郭実測図 …… 折り込み
第６図　第２郭礫群・柱穴列実測図 …… 9
第７図　第１号建物跡実測図 …… 10
第８図　第２号建物跡実測図 …… 11
第９図　第３号建物跡実測図 …… 12
第10図　第３郭２の段礫群実測図 …… 13
第11図　第４郭実測図 …… 14
第12図　第４号建物跡実測図 …… 16
第13図　第５郭及び縦堀実測図 …… 16
第14図　第６郭実測図 …… 17
第15図　第５号建物跡実測図 …… 18
第16図　配石遺構実測図 …… 19
第17図　溝状遺構実測図 …… 20
第18図　第７郭実測図 …… 21
第19図　第８郭及び第３号堀切実測図 …… 22
第20図　第１号・第２号堀切実測図 …… 23
第21図　第１号土壙周辺断面図 …… 24
第22図　第１号土壙実測図 …… 24
第23図　第２号土壙実測図 …… 25
第24図　古墓実測図 …… 26
第25図　出土遺物実測図（１） …… 39
第26図　出土遺物実測図（２） …… 40
第27図　出土遺物実測図（３） …… 41
第28図　出土遺物実測図（４） …… 42
第29図　出土遺物実測図（５） …… 43
第30図　出土遺物実測図（６） …… 44
第31図　出土遺物実測図（７） …… 44
第32図　出土遺物実測図（８） …… 45
第33図　出土遺物実測図（９） …… 46
第34図　出土遺物実測図（10） …… 46
第35図　出土遺物実測図（11） …… 47
第36図　出土遺物実測図（12） …… 48
第37図　出土古銭拓影 …… 49
第38図　弥生土器実測図 …… 50

図 版 目 次

図版１　池田城跡遠景（上空西から）
図版２　池田城跡全景（上空東から）
図版３ａ．第１郭・２郭（南から）
　　ｂ．第１郭ピット群（北から）
図版４ａ．第２郭礫群（南から）
　　ｂ．第３郭１の段（西から）
図版５ａ．第１号建物跡（東から）
　　ｂ．鉄滓出土状態（東から）
図版６ａ．第３郭２の段（南西から）
　　ｂ．同上礫群（北東から）
図版７ａ．ピット内炭化物・鉄滓出土状態(北から)
　　ｂ．第４郭東側（北西から）
図版８ａ．第４郭中央（北から）
　　ｂ．第４郭西側（北東から）
図版９ａ．第４号建物跡及び縦堀（東から）
　　ｂ．第５郭（北東から）
図版10ａ．第６郭北側（南東から）
　　ｂ．第６郭中央（南西から）
図版11ａ．第６郭南側（西から）
　　ｂ．配石遺構（東から）
図版12ａ．第７郭（北から）
　　ｂ．第４郭南側斜面石列（北西から）
図版13ａ．第８郭及び第３号堀切(北西から)
　　ｂ．同上（完掘後，北東から）
図版14ａ．第１号・第２号堀切（北東から）
　　ｂ．同上（完掘後）
図版15ａ．第１号土壙（東から）
　　ｂ．古墓（北東から）
図版16　出土遺物（１）
図版17　出土遺物（２）
図版18　出土遺物（３）
図版19　出土遺物（４）
図版20　出土遺物（５）
図版21　出土遺物（６）
図版22　出土遺物（７）
図版23　出土古銭
図版24　弥生土器

付 表 目 次

第１表　池田城跡出土土師質土器（皿・碗）法量分布図表 …… 27
第２表　池田城跡出土古銭一覧表 …… 31
第３表　池田城跡出土土師質土器（皿）分類表 …… 32
第４表　池田城跡出土土器類観察表 …… 35

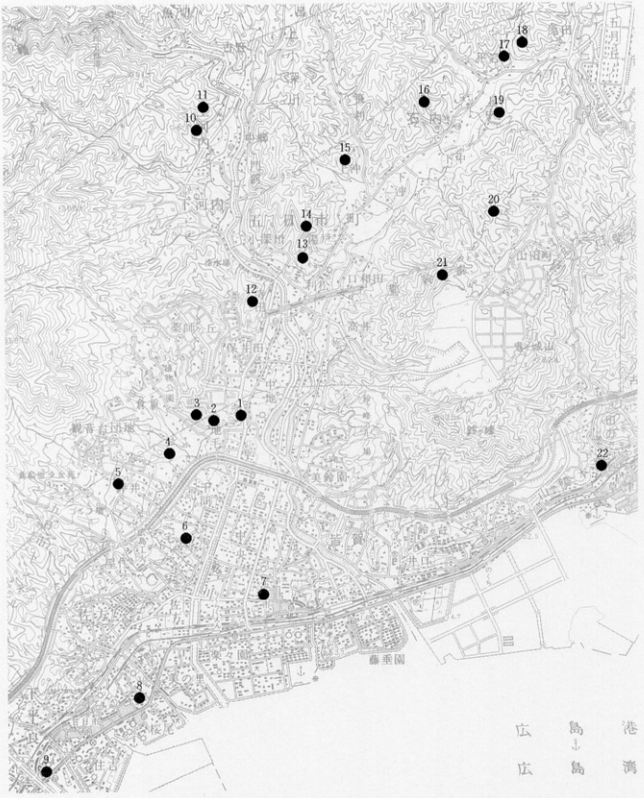
Ⅰ はじめに

広島市教育委員会では，昭和60年４月15日，広島市佐伯区五日市町城山土地区画整理組合から，同区画整理事業地内に所在する池田城跡の扱いについて協議を受けた。広島市教育委員会では城跡の保存について同組合と再三協議を重ねたが，同事業の計画変更，設計変更は不可能であり，記録保存を図ることもやむを得ないとの結論に達した。これを受けて，広島市教育委員会では，昭和60年７月15日に調査を開始し，10月31日に終了した。

なお，調査の関係者は下記のとおりである。

調査委託者	広島市佐伯区五日市町城山土地区画整理組合	
調査主体	広島市教育委員会	
調査担当係	広島市教育委員会社会教育部管理課文化財係	
調査関係者	森脇昭之	社会教育部長
	藤井克己	管理課長
	桧垣栄次	管理課文化財係長
	幸田　淳	管理課文化財係主事
	宇野孝子	管理課文化財係嘱託
調査者	奥田泰将	管理課文化財係主事
	中村眞哉	管理課文化財係主事
	岡野幸夫	管理課文化財係主事
調査補助員（発掘作業）	竹内サダ子，山田鈴雄，今村春江，国本敬子，国本直江，本田春子，道添キヌ子，森崎幸江，森崎レイ子，奥田掬子，長力初江，川本頼男，中田君枝，中田稔，中田南枝，森屋敷敏子，仲田勇，杉田春人，西垣内やす子，船越笑子，大背戸千香子，中山敦子，中村進，増崎正雄，梅田キク子，横山茂，丸山小夜子，新田松三，川本時子，寺本チズ子，高木ハルカ，野崎晃，上原優，舛田愛子，渡辺サツエ，福田幸枝，木村武勲，大下彰，西本秋穂，瀬戸静枝，沖本ウメノ，車順子，三宅忠子，尾川八重子，佐々木正行，馬場文雄，植野勝，丹田千里，岩井干城，原田敏治，中本俊憲	
（整理作業）	河合淳子，上林陽子，住川香代子，橋本礼子	

なお，広島市佐伯区五日市町城山土地区画整理組合，八幡公民館，石内公民館，観音公民館ほか多くの方から，調査を円滑に進めるために多大なご配慮とご協力をいただいた。さらに報告書の作成にあたって，東京国立博物館陶磁室，（財）東京都埋蔵文化財センター，広島大学考古学研究室，倉敷考古館，広島県草土千軒町遺跡調査研究所，広島県立埋蔵文化財センター，（財）広島県埋蔵文化財調査センター，広島県警察本部刑事部科学捜査研究所，（財）出光美術館金沢陽学芸員の方々から広範なご教示を戴いた。ここに記して謝意を表したい。



1．池田城跡　2．向山城跡　3．茶臼山城跡　4．月見城跡　5．長野遺跡　6．中垣内遺跡
7．光明寺城跡　8．桜尾城跡　9．藤懸尾城跡　10．土井岡城跡　11．山根城跡　12．深入城跡
13．宮尾城跡　14．徳美城跡　15．長尾城跡　16．水晶が城跡　17．串山城跡　18．今市城跡
19．有井城跡　20．狐が城跡　21．口和田土塁　22．草津城跡

第１図　池田城跡の位置と周辺の主要遺跡

Ⅱ 位置と環境

池田城跡は，広島市佐伯区五日市町大字五日市字城山に所在する。佐伯区は東・北・西の三方を山に囲まれ，南は瀬戸内海に面する。この地域を流れる河川をみると，佐伯郡湯来町に源を発する八幡川は，佐伯区の西部を窓ケ山（標高711.4m）山麓ぞいに東流した後，南流し瀬戸内海に注ぐ。石内川は，石内地区を南西に貫流し，下流で八幡川と合流する。本城跡は，通称極楽寺山（標高693m）から派生する丘陵の先端部にあり，眼前には，八幡川の沖積地が広がる。標高は51mを測り，東側の水田面との比高差は約40mある。

さて，本城跡周辺の山城の分布状況を概観しよう。まず，本城跡の近辺には，中世においても内陸交通の主要道であった古代山陽道が通っており，山陽道の周辺に多くの山城が分布している。一方，瀬戸内海は，中世以降内海水運の発達により，商品流通に大きな役割を果たすようになった。安芸国西部における主要航路は，広島湾沿岸に開かれ，この航路を押える位置にも中世山城が築かれている。

このように，本城跡周辺の山城には，旧山陽道を意識して築かれたものと，内海航路を意識して築かれたものがあると考えられる。

次に，本城跡の所在する五日市周辺の歴史を概観したい。まず，遺跡からみると，この地域には縄文時代以降の遺跡が散在するが，調査例が少ないため解明すべき点が多く残されており，詳細に述べることはできない。もっとも浄安寺遺跡[1]などの近年の発掘調査例によれば，弥生時代後期にこの地域の開発が進んだことをうかがわせるようである。このほか，奈良時代とされる中垣内遺跡があり，試掘調査の結果，重圏文と複弁蓮華文の軒丸瓦や重弧文と均整唐草文の軒平瓦が出土している。これは，官衙跡の可能性があり，注目される。また，中世の遺跡としては，山城以外に長野遺跡[2]が発掘調査され，掘立柱建物跡，井戸跡，石垣などが検出されている。これは，16世紀中葉の土豪層の屋敷跡と推定されており，県下では例が少なく，注目される。

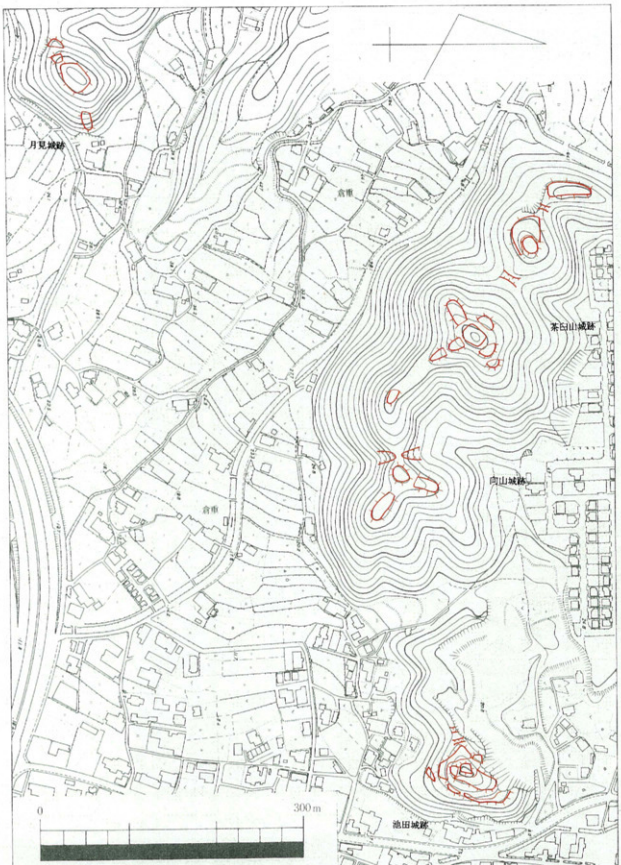
ついで，文献により，古代末期から中世にかけての状況をみよう。

古代において，佐伯郡周辺に勢力をもっていた佐伯氏は，厳島神社の神主職を代々世襲していた。また，佐伯氏の一族田所氏は，安芸国衙に入り，在庁官人として勢力をもった。

厳島神社は，神主一族と在庁田所氏との同族関係などから，安芸国一宮として繁栄し，平安末期には，平氏一門の熱烈な尊崇を得る。これに加えて，神主佐伯景弘が，平氏の安芸国進出に結びつき，安芸守に任ぜられたことから[4]，厳島神社は，安芸国内に多くの社領を形成するに至った。社領は，国衙在庁との関係から神主一族の領有するに至った半不輸田などの国衙免田系のものや，在地領主の寄進による荘園などからなり，佐西郡・佐東郡を中心に安芸国北部の山県郡・高田郡にも及んだ。

承久の変（1221）後，守護武田氏をはじめとする東国武士が安芸国に進出してくる。厳島神主職も佐伯氏にかわって幕府の有力御家人である藤原信実が任命され，以後神主職は藤原氏が世襲する[6]。藤原神主家は，信実をはじめとして，当初は現地に定住しなかったと考えられるが，神主一族は鎌倉期を通じて，徐々に土着化したようである。

南北朝期になると，荘園・国衙の支配秩序が崩壊しはじめる。この時期，神主家は賀茂郡の造果保をめぐって小早川氏と争ったり[7]，佐西郡己斐村の国衙領を押領するなど国人領主化し，応永の安



第２図　池田城跡周辺地形図

芸国人一揆（1404）に加わるようになる。[注9] 厳島社領は神主家の知行地と化すが，社領は，佐東郡を本拠とする武田氏らの押領が進み，[注10] 神主家の支配地は佐西郡一帯に限られるようになる。

厳島社領をめぐる神主家と武田氏の争いは，大内氏と厳島神主家が結び，細川氏が武田氏を支援したことにより，武力衝突へと発展する。大内・武田両軍の武力衝突は，文安4年（1447）からと考えられているが，[注11] 大規模な武力衝突が最初に確認されるのは，長禄元年（1457）である。[注12] このとき，大内軍は，武田氏の本拠金山城にまで押し寄せている。大内・武田両軍による武力衝突は以後もくりかえされ，この対立関係は，応仁の乱（1467～1477）にそのままひきつがれる。

永正5年（1508）大内義興に従って上洛していた厳島神主興親が病死すると，その後嗣をめぐって，小方加賀守と友田興藤が争った。この争いは，国許にも波及し，家臣団である神領衆が東西に分かれ，五日市の宍戸氏を中心とする東方は桜尾城（廿日市町），新里氏を中心とする西方は，藤懸尾城（廿日市町）にたてこもって対立した。これに，神領衆の対立に乗じて勢力を拡大しようとした武田元繁が加わり，佐西郡一帯は戦場となった。[注13]

武田元繁が有田合戦（1517）で敗死した後，大内氏は，神領衆の対立を利用して佐西郡一帯を直轄領とした。そこで，友田興藤は，大永3年（1523）と天文10年（1541）の二度にわたって大内氏に反抗したが敗れ，厳島神主家はここに滅亡する。[注14] 一方，武田氏は，応仁の乱後，安芸国に勢力を伸ばしてきた尼子氏を背景に，有田合戦後も大内氏と対立していた。しかし，天文10年，尼子氏が毛利・陶の連合軍に宮崎長尾合戦で敗れた直後，滅亡する。

厳島神主家・武田氏がともに滅亡した後，安芸国西部は，ひとまず大内氏の支配を受けるが，厳島合戦（1555）の後，毛利氏の支配下にはいった。大内氏に従属しながら，芸備両国に徐々に勢力を伸ばしてきた毛利氏は，厳島合戦により芸備両国を統一した。その後，毛利氏は，防長・山陰を攻略し中国地方を制した結果，安芸国内はひとまず安定する。しかし，関が原の戦い（1600）後，毛利氏は，防長二国に削封され，代って福島氏が芸備二国の領主として入国した。

以後，幕藩体制は着々と固められ，山城はその役割を終えた。

注

（1）（財）広島県埋蔵文化財調査センター『笹利追田遺跡発掘調査報告書』　1985参照

（2）五日市町教育委員会『中垣内遺跡試掘調査概要』　1985

（3）五日市町教育委員会『長野遺跡発掘調査概報』　1985

（4）「新出厳島文書」48号

（5）佐伯郡は，平安中期以降，佐東・佐西の両郡に分かれた。
広島県『広島県史・原始古代』　1980参照

（6）「野坂文書」428号

（7）「小早川家証文」491号～497号

（8）「東寺百合文書」せ武家御教書井達65－97・オ1－25

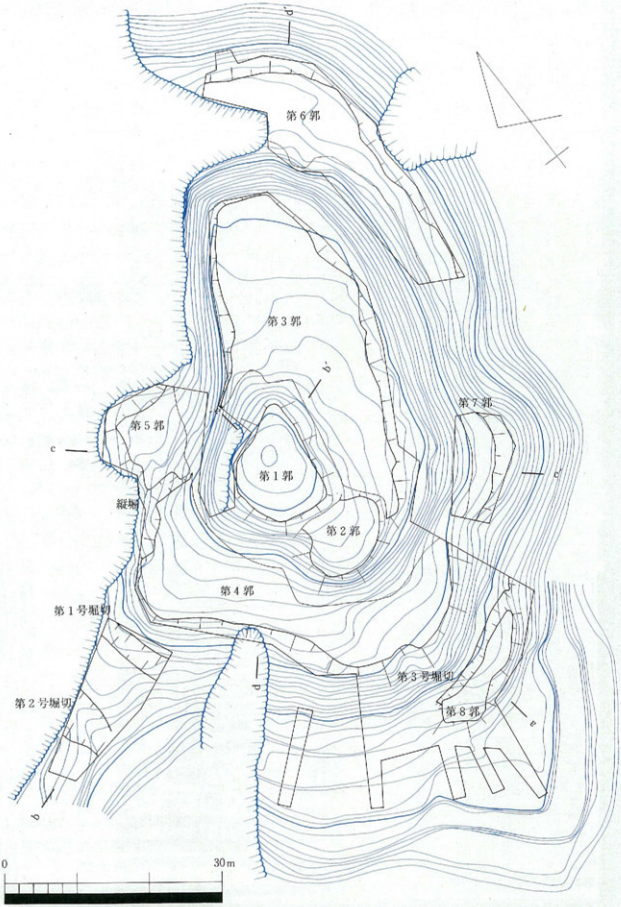
（9）『毛利家文書』24号

（10）「御判物帖」60号・62号　「巻子本厳島文書」15号

（11）河村昭一「応仁の乱と芸備の動向」『広島県史・中世』　1984

（12）『大内氏実録』巻第8，『毛利家文書』87号・88号，『吉川家文書』46号

（13），（14）「房顕覚書」

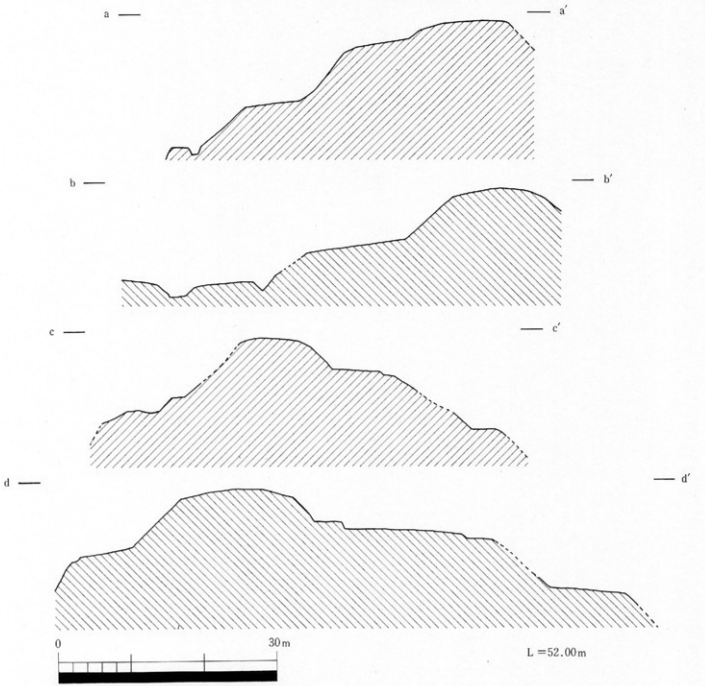


第3図　池田城跡地形測量図及び遺構配置図

Ⅲ 遺　　構

本城跡は，標高51m，崖下水田面との比高差約40mを測る通称城山の最高所を中心に，四方へ郭を配した輪郭型[注1]の中世山城である。

今回の発掘調査の結果，郭を8か所，堀切を3か所，縦堀を1か所検出した。郭は最高所のものを第1郭とし，第1郭の南側に接するものを第2郭，第2郭の東側に接し，第1郭の東側から北へ伸びる，本城跡中最大の面積を有するものを第3郭，第1郭と第2郭を西側から南側へかけて囲うように配されたものを第4郭，第4郭の北側に縦堀を隔てて配されたものを第5郭，第3郭の北側から東側へかけて巡らされたものを第6郭，第6郭の南側の小規模なものを第7郭，本城跡の最南



第4図　池田城跡断面実測図

端に位置し，第４郭と堀切で隔てられたものを第８郭とした。なお第３郭の一部については，1981年，土取り工事に伴って発掘調査が実施されている[注2]。当時既に本城跡の北側と西側の一部は削られており，第５郭，第６郭の一部はこれにより失われたものと思われる。

堀切は，本城跡の南側の尾根上に位置し，第４郭直下のものを第１号堀切，第１号堀切の西側に第１号堀切と平行に配されたものを第２号堀切，第４郭と第８郭の間に位置するものを第３号堀切とした。

城跡以外の遺構として，積石基壇をもつ古墓１基，土壙２基を検出した。また弥生土器と須恵器の破片が出土したことから何らかの遺構の存在が推定されたが，これを明らかにすることはできなかった。

なお８か所で検出された郭は，配置，機能などからⅢ群に大別できる。Ⅰ群は第１郭，第２郭，第３郭で，本城跡の頂部に位置し，施設配置の中心をなしている。Ⅱ群はⅠ群を囲って東西南北に配された第４郭，第５郭，第６郭，第７郭である。Ⅲ群はⅠ群，Ⅱ群の更に外にあり，堀切で隔てられた第８郭である。以下これらの各遺構について述べていきたい。

第１郭（第５図）

本城跡の最高所に位置し，標高48.7～51ｍを測る。長軸16ｍ，短軸12ｍを測る卵形のプランを呈し，断面形はわずかに凸面状を呈す。東側と北側では地山面が削られて緩傾斜面となり，第３郭との間の急傾斜面に接する。西側は急傾斜面に接する。

本郭内からは大小のピットが検出された。径60～75㎝，深さ30～50㎝を測る大形のものと，径10～30㎝，深さ15～45㎝を測る小形のものがある。大形のものは本郭のほぼ中央から南にかけて検出され，小形のものは北側から西側に検出した。大形のものの底面レベル差は最大90㎝，小形のものが１ｍを測る。ピットの形状などから柱穴と考えられるものもあるが，これらを関連づけることは困難である。

なお，径１ｍ，深さ32㎝を測る土壙が検出されたが性格などは明らかでない。

第１郭からは土師質の土器片など少量が出土した。

第２郭（第５図）

第１郭の南側に位置し，第１郭南端との比高差１ｍをもつ。東西12ｍ，南北９ｍを測り，平面プランはほぼ楕円形を呈す。南側から西側の地山面は緩傾斜面となっている。

本郭内からは，第１郭との境となる斜面下端に東西方向に並んだ礫群を，礫群の下から柱穴列と溝を検出し，他に土壙，大小のピットを検出した。遺物は土師質土器（**35**，**55**）古銭などが出土した。

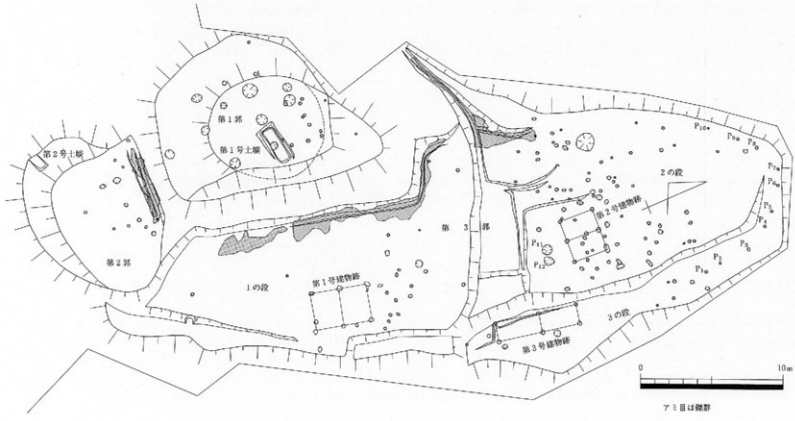
第２郭礫群（第６図）

第２郭の北縁，第１郭南側斜面の直下で東西方向に並んで検出された。全長約5.3ｍ，幅約１ｍを測る。礫は10～30㎝大の河原石と花崗岩の角礫が見られ，流れ込んだ状態で検出された。

礫群の下からは幅25㎝，長さ5.1ｍを測る浅い溝状の掘り方が検出された。掘り方の中にはさらに径16～22㎝，深さ26～36㎝を測るピットが４個検出された。ピットは２ｍ程度の間隔をもって東西方向に並び，形状などから柱穴と考えられる。

これらは相互補完的に第１郭南側斜面の土留めなどに使用されたものと考えられよう。

このほか本郭内からは，径17～34㎝，深さ14～32㎝を測るピットが12個検出されたが，明確な関連性は認められず，建物などを想定するには至らなかった。



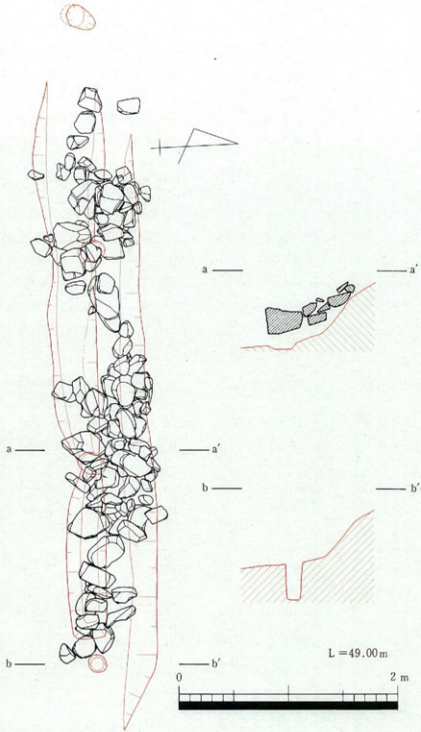
第5図　第1郭・第2郭・第3郭実測図

第３郭（第５図）

南端で第２郭北側の緩傾斜面に接し，第１郭の東側斜面をほぼ垂直に削り取って第１郭東側から北側へ張り出した郭で，南北45ｍ，東西最大17.5ｍを測る本城跡中最大の面積を有している。標高44～47ｍを測り，東側と北側に緩やかに傾斜するが，２か所で地山をほぼ垂直に削り落し，大きく３段に構築されている。

１の段は第１郭の東側に位置し，第１郭との比高差３ｍ，南北22ｍ，東西最大16ｍを測るＬ字状のプランを呈する。２の段は１の段の北側に接し，１の段との比高差約１ｍ，南北20ｍ，東西最大17.5ｍを測る砲弾形のプランを呈する。３の段は２の段の東側に接し，南端で２の段との比高差1.5ｍをもつ幅約３ｍ，長さ25ｍに亘る帯状の平坦面である。

３の段と２の段は北端でつながる。２の段は，南西隅から意図的に削平していないと考えられる緩傾斜面が通路状に検出され，これで１の段と連絡するものと思われる。１の段の東縁に幅１ｍ程度の平坦面が検出され南側は第４郭との間の急傾斜面に至る。



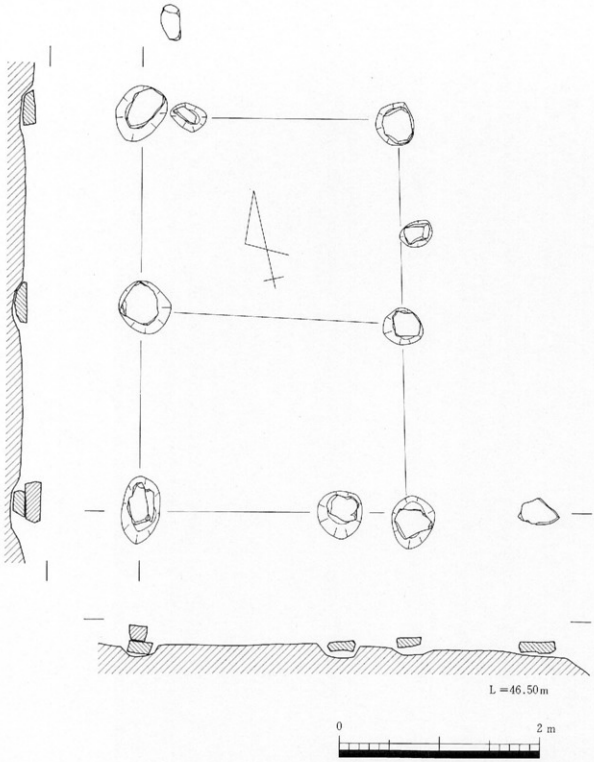
第６図　第２郭礫群・柱穴列実測図

第３郭からは多数のピットと礫群，溝，礎石などを検出した。また，土師質土器をはじめ瓦器，陶磁器，鉄滓など多くの遺物が本郭から出土した。

第１号建物跡（第７図）

第３郭１の段中央東側から，礎石を配した１間×２間の建物跡を検出した。

建物は桁行3.9ｍ，梁間2.6ｍを測り，桁行方向はほぼ南北を指す。柱間は，桁行で約２ｍ，梁間で2.6ｍを測る。礎石とした石材には，一辺25～40㎝の上面が平坦な角礫が用いられ，地山面を10㎝



第７図　第１号建物跡実測図

程度掘り下げて据えられていた。南西隅に位置する礎石は2段に積まれているが，下段の石の上面は他の礎石のレベルと同一であり，上段の石はこの上にある。上段の石は，建て替えなどの際にもとの礎石に重ねられた可能性が考えられる。

東側の桁，両側の梁の主柱の間に，礎石と考えられる石材が検出されたが，位置的に主柱を支えたとは考えにくい。また，北西隅と南東隅の外側に，上面平坦でレベルからも礎石と考えられる角礫が検出され，建物跡との関連が考えられるが，性格づけは困難である。

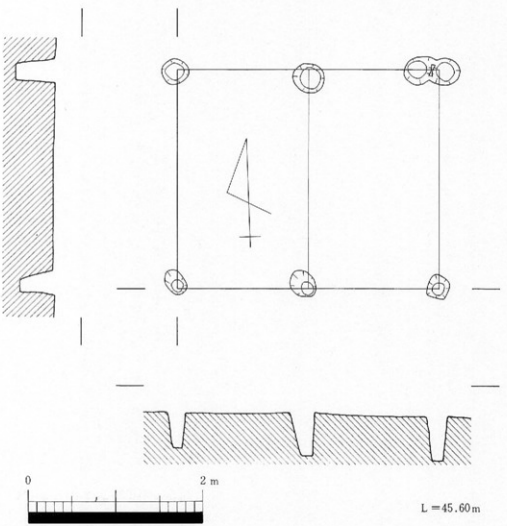
本建物跡内から，土師質土器（2，9，50，51，52）が出土した。

第2号建物跡（第8図）

第3郭2の段のほぼ中央東よりに検出した，桁行3m，梁間2.5mを測る1間×2間の掘立柱建物跡である。柱穴は径25～30cm，深さ40～50cmを測りほぼ一定している。桁行の柱間は1.5mを測り桁行方向はほぼ東西を指す。

第3号建物跡（第9図）

第3郭3の段の東南隅で検出した，桁行5.8m，梁間1.4mを測る南北に長い1間×2間の掘立柱建物跡である。柱穴は，径20～35cm，深さ35～42cmを測り，桁行の柱間は北側で2.6m，南側で3.2m



第8図　第2号建物跡実測図

を測り，不等間隔である。桁行方向はほぼ南北を指す。

柱穴列（第５図）

第３郭３の段から２の段の北縁辺に沿って連るピット P_1～P_{10} は，径10cm前後，深さ15～36cmを測り，形状，配列関係から柱穴と考えられる。柱穴間の距離は，２m前後を測るものと，1.1m前後を測るものがあり，P_3 を除いて２本１組の組合わせが可能である。

P_1 の南側に位置するピットにも，深さ，距離ともにこれらとほぼ等しいものがあり，柱穴列と関連すると考えられるが，対応関係が明確でない。P_8，P_{10} の南側のピットについても同様である。

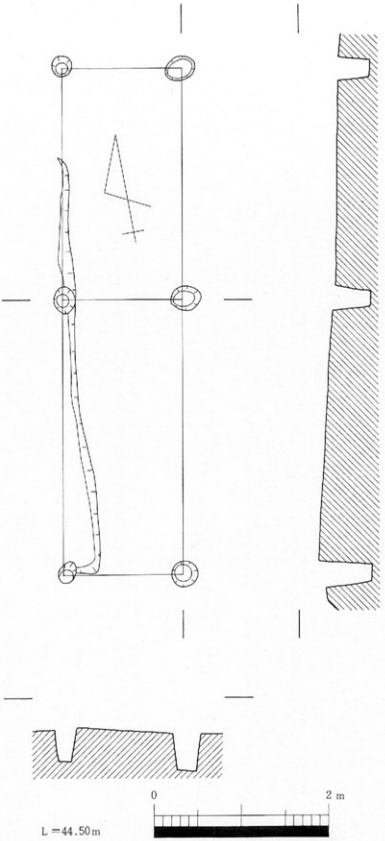
この柱穴列の性格については，第３郭２の段，３の段の縁辺に位置し第３郭の北端を囲う状態にあることから，柵列などの施設が想定できよう。

第３郭からは，このほか多数のピットが検出され，建物などの施設が相当数存在したと窮わせるが，ピットの関連は明らかでない。

第３郭礫群（第５図）（第10図）

１の段の西縁と２の段の南縁西側の２か所で検出した。

１の段の礫群は，第１郭東側斜面直下の第３郭西縁辺に沿って，幅約1.5m，延長約20mに亘るＬ字状のプランを呈して検出された。礫は一辺40cmの角礫と，人頭大から拳大の河原石を含んでいる。礫群は南側から北側へ緩やかに傾斜しており，南側で高さ１mを測るが，北端部では地山面上に点在して検出された。この礫群は，第１郭の東側から北側の



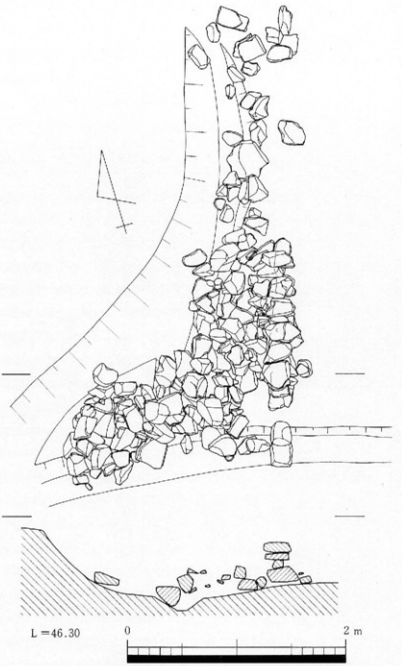
第９図　第３号建物跡実測図

斜面直下に流れ込んだ状態で検出されたことから，第１郭の東側から北側にかけて，斜面の土留めの石材として使用されたものが転落し堆積したと推定される。なおこの礫群の下からは，幅約30cm，深さ10cmを測る溝が，長さ15ｍに亘って検出された。

２の段の礫群は，南西隅の通路状の地山と削平面の境に沿って検出され，東西7.5ｍ，南北4.4ｍを測る，くの字状のプランを呈す。

礫は少量の河原石を含むが，ほとんどは20～30cmの角礫である。このうち南北方向の礫群の東端部から，西側に小口面を揃えて３，４段に積まれた部分を検出した。この石積みは，南北約２ｍを測るが，さらに北側と南側の延長線上に角礫が点在しており，もとは２ｍ以上に亘って築かれていた可能性がある。この石積みは，礫群の西側から五輪塔の残欠が検出されたことなどから，墳墓の可能性が考えられよう。

西側の礫群は，後述する第１郭北側斜面直下に掘られた溝の中に検出された。礫は角礫が多く，五輪塔の残欠（地輪）も含まれていた。



第10図　第３郭２の段礫群実測図

礫群は，石積みの東側に礫が存在しないこと，溝の中から地輪を含んで検出されたことなどから，通路状の地山と石積み及び１の段との境で囲まれる範囲を，墳墓などの石材で意図的に埋められたものと考えられる。

さて，礫群の下から検出された溝についてであるが，西端で深さ１ｍ，上端幅50cmを測り，東と北へ分岐するＹ字状のプランを呈している。２の段の南端ほぼ中央に，長さ7.5ｍ，西辺約２ｍ，東辺３ｍ，深さ30cmを測る，平面台形状の窪みがあり，溝はこの西南隅から１の段との境に沿って掘られ，西側で次第に深くなる。北側部分の溝は，通路状の地山の東側の裾に沿って掘られており南端は前述の溝とつながる。

台形状の窪みについては不明な点が多く，これと関連する溝についても性格は明らかでない。

第11図　第４郭実測図

礫群の下から備前焼の摺り鉢（**64**，**66**）や土師質土器（**10**，**45**）などが出土している。

なお，このほかに第３郭の２か所から鉄滓が出土しているのでこれについて述べておきたい。

１か所は，１の段の第１号建物跡の北側で1.5ｍ四方に鉄滓及び焼土が検出された。これらは地山面から４～15cm遊離し，厚さ５～10cmの層状をなして検出された。鉄滓は径20cm程度の碗形状を呈するものから，指先大の小塊のものまであり，一部にはガラス質の付着したもの，石や焼土を含むものも見られる。また重量から鉄分を多く含むと思われ，形状などからも鍛冶滓である可能性が強い。総重量約15kg出土した。

もう１か所は２の段の第２号建物跡南側のピットP_{11}，P_{12}で，内部から炭化物とともに鉄滓が検出された。P_{11}は径70cm，深さ15cmを測る円形プランを呈し，P_{12}はP_{11}の東側直近に位置し，長軸80cm，短軸60cm，深さ20cmを測るほぼ楕円形のプランを呈する。鉄滓は親指大のものから小片がほとんどで，表面は多孔質であり，比重も大きいことから鍛冶滓と思われる。総重量約1.5kg出土した。

炉壁などは検出できず，また羽口などの遺物も出土していないことから即断は避けたいが，鉄滓の状況からは本城跡内で鍛冶の行われた可能性が強いと言えよう。

以上，第３郭からは多様な遺構を検出した。このことは本郭が本城跡中最大の面積を有していることもあるが，本城跡の重要な位置にあることを示すものと言える。

第４郭（第11図）

第１郭と第２郭の斜面下に，西側から南側へこれらを囲うように配された２つの段からなる郭である。

１の段は，第１郭，第２郭の西側を囲み，第１郭との比高差５～７ｍをもって南側に緩やかに傾斜する。第１号堀切と第１郭西側斜面下との間で，最大幅13ｍをもち，南北約35ｍを測る。２の段は，１の段から１ｍ下がって東側に続き，東側へ緩やかに傾斜する。１の段は北端で縦堀と接する。２の段は東端で第７郭との間の急傾斜面に至る。

第４郭からは，礫群が１の段，２の段に点在して検出され，一部は上方からの転落によるものと思われる。また，第１郭と第２郭の斜面下の縁辺に沿って浅い溝が検出された。

この他，大小のピットが検出され，土師質土器（**22**，**38**，**39**，**41**，**49**）などが出土した。

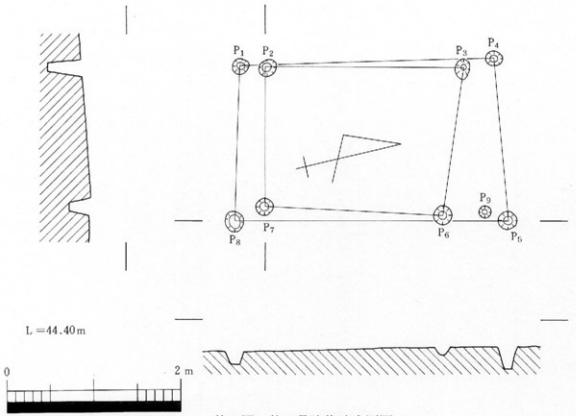
第４号建物跡（第12図）

第４郭１の段の北東隅に検出した１間×１間の掘立柱建物跡である。柱穴は９個検出され，基本的には小形のP_9を除いた８個が主柱穴と考えられる。これらは径20cm前後，深さ12～25cmを測り，次の組合せが想定される。①$P_1-P_4-P_5-P_8$，②$P_1-P_3-P_6(P_9)-P_8$，③$P_2-P_4-P_5-P_7$，④$P_2-P_3-P_6(P_9)-P_7$，①で桁行約３ｍ，深間1.8ｍ，④で桁行2.0ｍ，梁間1.6ｍを測るが，各々の対応関係は不明であり建て替えの可能性もある。桁行の方向はほぼ南北を指す。

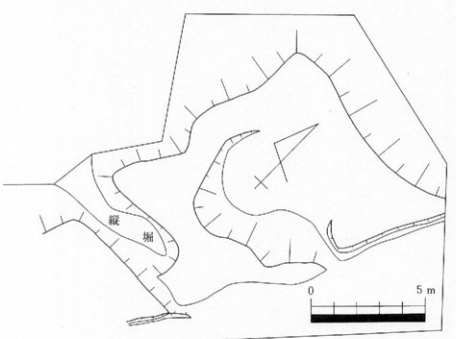
本郭からは，このほかに１の段で，径１ｍ，深さ30cmを測る楕円形プランを呈する土壙，２の段で幅1.9ｍ～2.8ｍ，長さ８ｍ，深さ0.7～1.8ｍを測る長方形プランを呈する大形の土壙を検出したが，性格は不明である。

第５郭（第13図）

第１郭の西北側急斜面下に位置し，第４郭とは縦堀で隔てられている。第１郭との比高差約９ｍを測り，５ｍ四方の平坦面と通路状の傾斜面から構成される。東縁辺には幅40cm，深さ10cmを測る溝が北東方向へ伸びるが，本郭の北側部分は既に破壊されており全長は不明である。平坦面も本来はもう少し広がるものと思われる。



第12図　第４号建物跡実測図



第13図　第５郭及び縦堀実測図

通路状傾斜面は平坦面の西側外周に沿って上り，上部は二方向に分かれる。南側は縦堀の東側を通って第４郭に至る。北側は第３郭に向って更に伸びる様相を呈して検出された。発掘調査前の地形観察によれば，第１郭西側斜面に本郭と第３郭を結ぶ通路がみられたが，第３郭２の段の西南隅に検出された通路状の地山と本郭の通路状傾斜面は幅30cm程度で急傾斜してつながり，防ぐに足り

る通路を設けたものと考えられ，城が廃棄された後も山道として利用された可能性が考えられよう。

本郭は，北西方向からの攻撃に対する防禦の前線に位置すると考えられ，縦堀とともにその機能を発揮するよう構築されたものと思われる。

本郭からは備前焼の大甕の口縁部とともに古銭3枚が出土している。

第6郭（第14図）

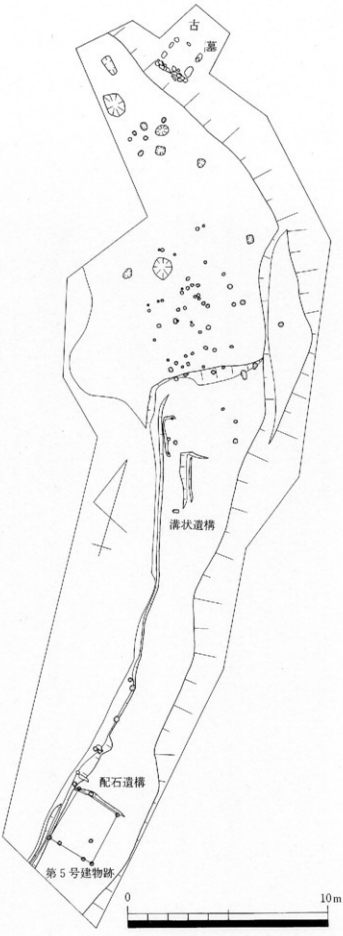
第3郭の北側斜面下から東側斜面下にかけて配された，最大幅11m程度で，延長45mを測る帯状に細長い郭である。本城跡の最北端に位置し，郭の北側で第1郭との比高差12.5m，第3郭3の段との比高差6.5m，標高34.5～37.1mを測り南側へ緩やかに上る。郭はほぼ中央で約50cm程度の段差をつけ，北側を高くしている。さらに東側に1段削り出している。

第6郭からは大小のピット，溝などを検出し，土師質土器，陶器，鉄器など第3郭とともに多数の遺物が出土している。

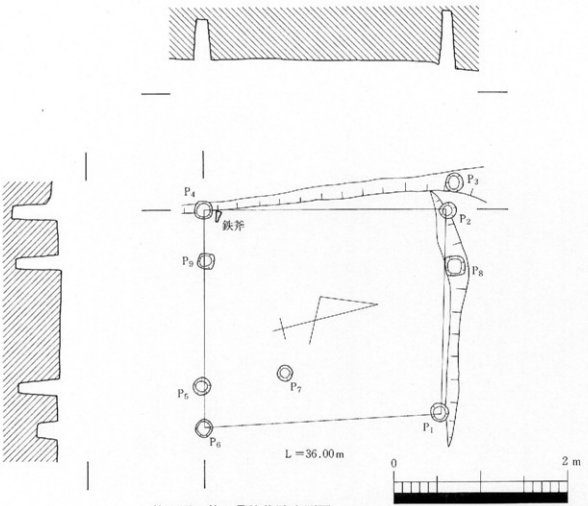
第5号建物跡（第15図）

第6郭南端部に検出した，1間×1間の掘立柱建物跡である。柱穴は9個検出され，径20cm前後の円形プランを呈するもの（P_1～P_7）と一辺15～20cmを測る方形プランを呈するもの（P_8，P_9）がある。深さはP_1～P_5，P_8，P_9が40～50cmとほぼ一定しているがP_6，P_7は，23cm，11cmを測り浅い。P_7は位置関係から主柱穴とは考えられず，これを除いた8個で建物が想定される。①$P_1-P_3-P_4-P_6$，②$P_1-P_2-P_4-P_6$，③$P_1-P_9-P_8-P_6$の3通りの組合せが考えられる。②で桁行2.75m，梁間2.3m，③で梁間1.8mを測るが，各々の対応関係は明らかでない。桁行方向はほぼ南北を指す。

なお，この建物跡は西縁で溝に接し，P_4の直近から鉄斧が出土している。



第14図　第6郭実測図



第15図　第５号建物跡実測図

配石遺構（第16図）

第５号建物跡の北側西縁に検出した大小５個の角礫からなる遺構である。南側に２個，北側に３個，1.7ｍ隔てて配されている。南側の石は，幅10～15㎝，長さ55㎝の断面台形の細長い石柱状の石と15㎝四方の角礫が横に配されている。北側の石は，10㎝程度の角礫を２個両端に配し，その上に，30㎝×20㎝，厚さ７㎝程度の板状石をほぼ水平に置いた状態で検出された。南北の石の上面のレベル差は約10㎝である。

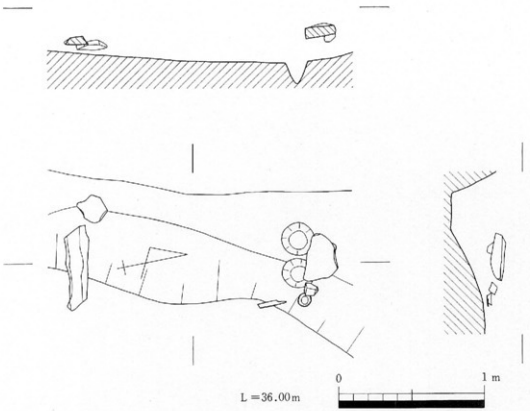
これらの石は第５郭の西縁辺に浅く掘られた溝の上層に，地山面から５～25㎝浮いた状態で検出された。北側の石の直近に，土師質の皿（**33**）と刀子（**84**）が南北に並んで出土し，これらは角礫の下端と同一レベル上にあった。

また北側の石の南下に２つのピットを検出した。これらのピットは径20㎝，深さ30㎝を測り，溝の中に位置する。これらのピットの南北には約２ｍ程度のほぼ一定した間隔をもつピット群が溝内から検出され，形状などから柱穴と考えられるが性格などについては不明である。

さて配石遺構の性格については，石の配置，出土遺物の状況から墳墓も想定されようが，溝，柱穴などとの関連から時期的には郭の使用時期とは後出のものと考えられ，また中，近世の埋葬形式と考えることは困難であり，断定することはできない。

溝状遺構（第17図）

第６郭のほぼ中央西側に，最大幅60㎝，中央付近の深さ20㎝を測り，南北2.3ｍにわたる溝状の



第16図　配石遺構実測図

掘り方を検出した。この掘り方の上層からは長辺40cm大から拳大の角礫や五輪塔の空風輪，土師質の鍋（**58**）が出土した。角礫は掘り方の底面から30cm上層の間に堆積し，ほぼ掘り方に沿って並ぶ。空風輪及び土師質の鍋は，この掘り方の北端部上層に角礫と混在して出土した。掘り方は北端で東側に少し折れて消失する。

本遺構の性格については土師質の鍋と五輪塔の残欠が出土していることから，土師質の鍋が蔵骨器として利用される例もあり墳墓も想定できようが，遺物の関係は明らかでなく断定はできない。

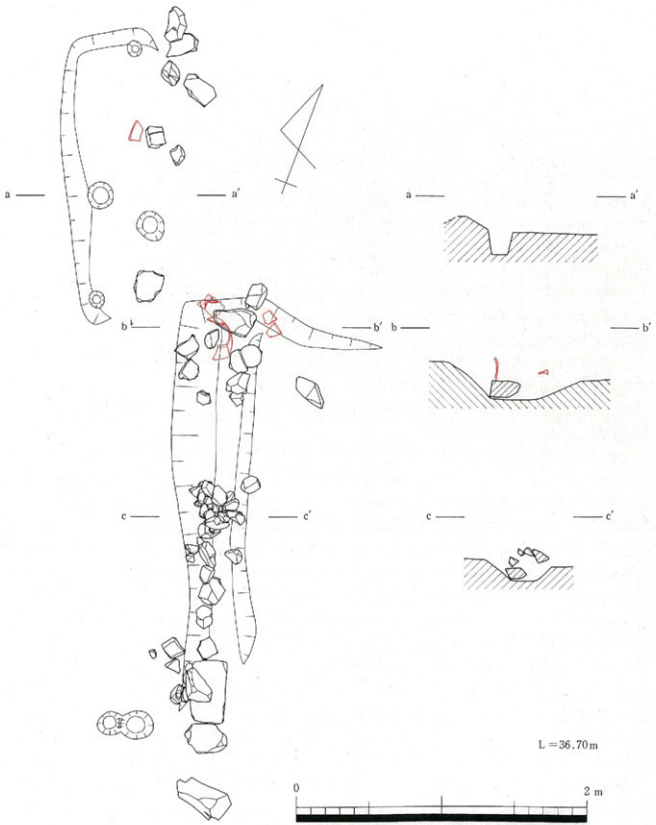
なお，本遺構の北側に，南側から伸びてきた溝に接してほぼL字状に地山を削り出した掘り方を検出した。掘り方は，南北1.9mを測り北端で東へ折れ，60cm伸びる。深さは中央で約10cmを測る。南側はわずかに東へ伸びる痕跡をとどめる。この掘り方から東側で，径10～20cm，深さ8～19cmを測る柱穴と思われるピットを検出した。また掘り方に沿って点在する角礫を検出するとともに，土師質の鍋（**59**）が出土した。これらは溝状遺構と何らかの関係をもつと推測されるが，明らかにできない。

第7郭（第18図）

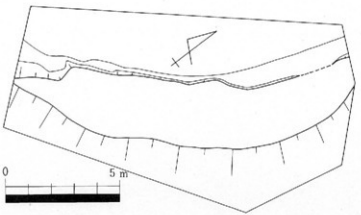
第3郭南端東側斜面下の第4郭と第6郭を結ぶ線上に位置する。中央で第1郭との比高差11.5m，第3郭1の段の東端との比高差約7mをもち，最大幅3m，長さ15mを測る比較的狭い郭である。郭は中央部分がやや高く南側と北側に緩やかに傾斜し，両側とも自然地形の急傾斜面に至る。

本郭は面積的には狭小であるが，第5郭とともに本城跡の両翼に位置し，武者溜り的様相の濃い郭と考えられる。

本郭からは土師質土器（**18**）などが出土した。



第17図　溝状遺構実測図



第18図　第 7 郭 実 測 図

第８郭（第19図）

第４郭２の段の南側斜面下に堀切を隔てて配された，最大幅4.5m，長さ17.5mを測る中央部分のくびれた細長い郭である。中央で第１郭との比高差15.7m，第４郭２の段との比高差5.5mを測り，南西側へ緩やかに傾斜する。

本郭は北側を第３号堀切，西及び南側を溝で囲まれ，東側は自然地形の急傾斜面と接している。

溝は，第４郭西南側斜面下から次第にレベルを上げながら西側へ伸びており，上端幅1.5m程度で深さは最大90cmを測る。溝内から河原石を含む礫群が流れ込みの状態で検出され，転落と思われる。溝の底面からは備前焼の破片や土師質土器片が出土した。

第８郭，溝，堀切の配置関係などから，これらは一体的な機能をもったものと考えられ，第８郭は捨て郭的に配されたものと言えよう。

なお，溝の外側（南西側）に郭の存在することも想定されたが，トレンチ調査の結果，後世の耕作のため地山を削り出した畑の段が現地形に沿って検出され，郭の存在は確認されなかった。

また第８郭のほぼ中央から人骨が出土したが遺構との関連は明らかでない。

第１号，第２号堀切（第20図）

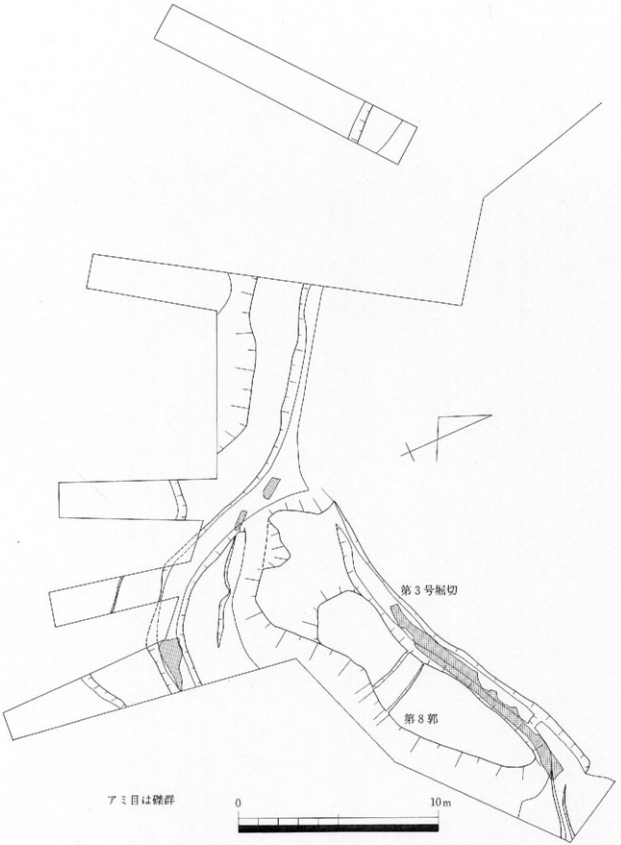
第４郭１の段の西側尾根のくびれた部分に尾根に直交して掘られた２本の堀切である。

第１号堀切は，第４郭１の段の西側斜面下に最小上端幅３m，最小底部幅15cm，中央深さ約1.2mを測り，南北長10mにわたって検出された。断面形は薬研形を呈している。堀切の両端は自然地形の斜面に至ると思われる。

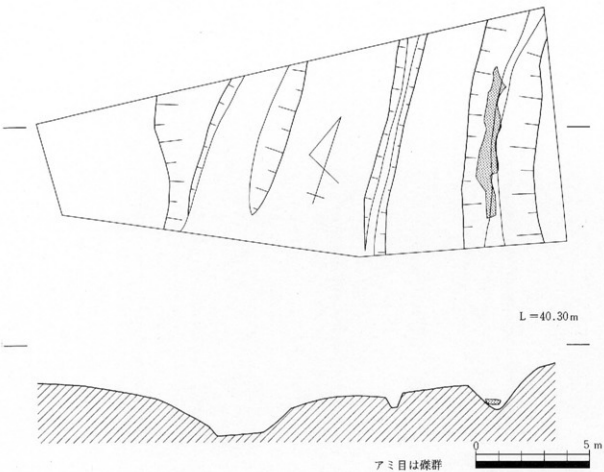
第２号堀切は，第１号堀切の約７m西側に第１号堀切と平行に検出された。最小上端幅4.5m，最小底部幅1.5m，中央の深さ１mを測り，南北長７mにわたって検出された。断面形は箱薬研を呈している。北側は土取り工事により既に削られており，確認できないが，南側では自然地形の斜面に至る。

第１号堀切の底部西側に，幅30～50cmで長さ6.5mにわたる礫群を検出した。礫は30cm大の角礫から拳大の河原石を含む。礫の重なった状況，土層観察などから，これらの礫は上方からの転落と考えられる。

なお，第１号，第２号堀切の間の地山面は頂部が削平されており，一つの平坦面として堀切とともに防禦的機能を意識して配されたものと考えることができよう。またこの平坦面の中央から第１号，第２号堀切と平行して掘られた上端幅約80cm，最小底部幅20cm，中央付近の深さ50cmを測る溝



第19図　第８郭及び第３号堀切実測図



第20図　第１号・第２号堀切実測図

を検出した。溝は，平坦面とほかの堀切とともに何らかの防禦的機能をもったものと考えられるが，使途は明らかでない。

第２号堀切西側の埋土中から鉄刀が出土している。

第３号堀切（第19図）

第４郭２の段の南側斜面と第８郭の間に位置し，上端幅1.3m，東側の深さ1.5m，長さ18mを測り，西側に向かって浅くなる。断面形は箱薬研を呈している。東端は開口ぎみに終り，自然地形の急斜面へ至る。

本堀切内から多数の礫が検出された。礫は30cm大の角礫から人頭大の河原石を含み，堀切の底面から上端まで堆積した状態にあった。検出状況や土層観察などから，かなりの時期にわたって転落したものと考えられる。

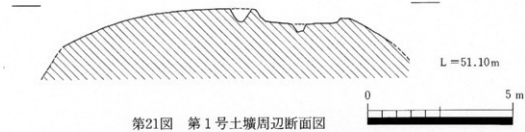
本堀切西側の上方，第４郭南側斜面の中腹に，長辺30cm大の板状石が５個，ほぼ並んで検出された。これらの石材は地山を１～1.8mにわたって平坦に削り出し，その上に置かれた状態にあった。

この石列を手がかりとして考えれば，第３号堀切内から検出された礫群は，第４郭南側斜面中腹の石列と関連することが想定され，第４郭の端部を整形するとともに土留め的に用いられた石材である可能性が考えられる。

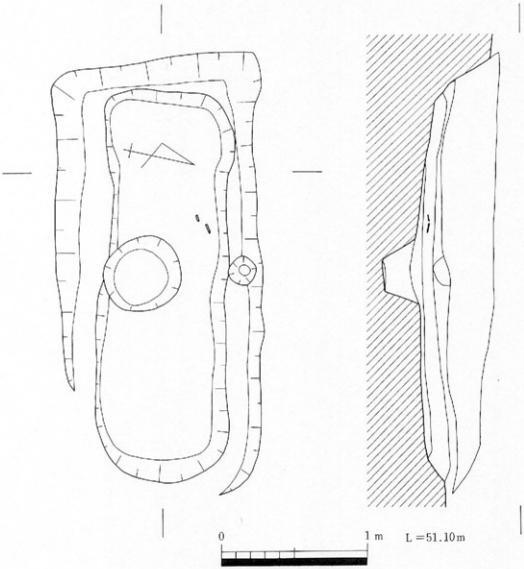
本堀切内からは備前焼（**68**）などが出土した。

縦堀（第13図）

すでに第５郭で少し触れたが，第４郭と第５郭の間に位置し，上端幅約２mを測る。西側へ傾斜



第21図　第１号土壙周辺断面図



第22図　第１号土壙実測図

し，東端から５ｍのところでラッパ状に広がり，自然地形の急傾斜面に至る。縦堀の東端と第１郭西側斜面下の間に幅1.5ｍの緩斜面があり，第４郭の通路として意識的に残されたものと考えられる。

その他の遺構

第１号土壙（第21図，第22図）

第１郭の東側で検出した二重土壙である。一次土壙は長軸2.82ｍ，短軸1.35ｍ，深さ最大40㎝を測り，平面形はほぼ長方形を呈している。二次壙は一次壙の底面の端から10～25㎝内側に掘り込まれ，長軸2.45ｍ，短軸0.65ｍ，深さ10㎝を測る。二次壙の掘り方は東側で一部消失するが，東北隅でわずかに南側に折れている。長軸はほぼ東西方向を指す。

土壙内からは，二次壙の中央北側で底面から３㎝浮いて刀子が出土したのみである。

本土壙の性格については，土壙の形状及び刀子が出土したところから墓壙と考えられよう。また第１郭のほぼ頂部に位置し，第１郭地山面が凸面状をなしていること，第１郭南側斜面下方から須恵器の小片が流れ込みの状態で出土したことなどから，古墳の主体部である可能性が考えられよう。

なお土壙内に柱穴が検出されたが，これらは土層観察により，土壙より後出のものであることを確認した。

第２号土壙（第23図）

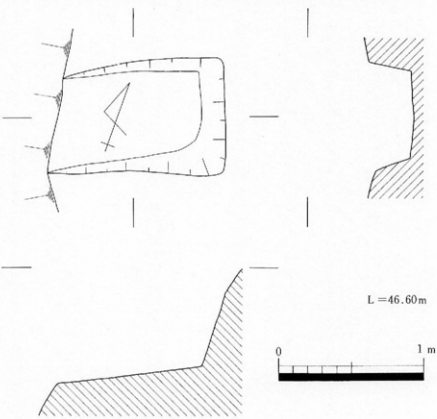
第２郭の西南端に検出した。西辺部は失われている。平面形はほぼ方形を呈し，現存長軸1.15ｍ，短軸0.8ｍ，深さ0.5ｍを測り，長軸はほぼ東西方向をさす。断面形は逆台形状で底面はほぼ平坦である。土壙内からの出土遺物は皆無で，時期，性格などについては明らかでない。

古墓（第24図）

第６郭北側斜面に検出した方形の積石基壇をもつ古墓である。長軸1.8ｍ，短軸1.5ｍを測り，石材は地山面から10㎝程度遊離している。基壇上面は，地山面に沿って北側へ傾斜して検出され，南端と北端のレベル差70㎝を測る。長軸はほぼ南向を指す。

積石基壇は，大形の石と玉砂利からなり，河原石が大部分であった。北辺には大形の石がみられなかったが，西辺で２，３段に積まれており，この状態から大形の石で四周を囲ったものと考えられ，北側の石材は地形の状況などから流出した可能性が強い。

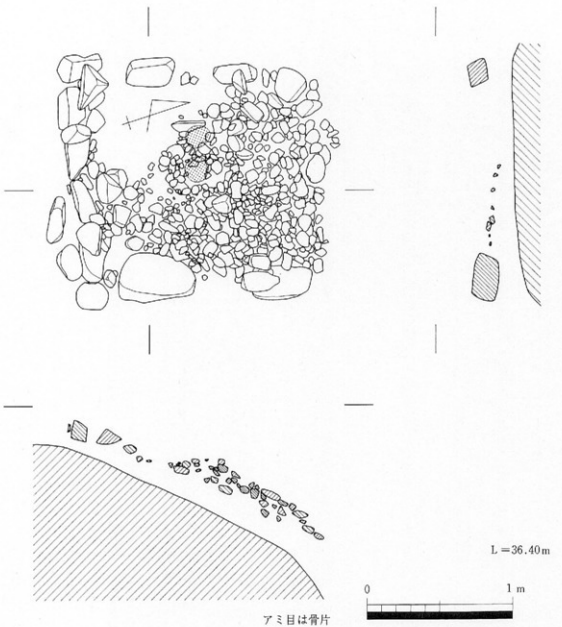
基壇の北東隅上層から五輪塔の水輪が出土した。しかしほかの五輪の部位はみられず，検出位置から基壇上部に



第23図　第２号土壙実測図

五輪塔が建てられていたとは断定しがたい。このほかの遺物は皆無であるが，基壇のほぼ中央に火葬骨が少量玉砂利中に残存していた。

積石基壇の構造は，妙音寺原遺跡の第５号古墳に類似した特徴を有している。(注3)



第24図　古　墓　実　測　図

注

（1）　広島市教育委員会　広島市の文化財第20集『山城』　1982　で本市教委が行った山城の型式分類試案による。

（2）　五日市町教育委員会『池田城跡発掘調査概報』　1981

（3）　広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（４）』　1982所収，同報告で古墓群の類別と編年が行われているが，本古墓は同類別および編年の「第Ⅱ期，基壇Ｃ類」もしくは「基壇Ｄ類」に属し，これらは室町時代中期以降から江戸時代初期と考えられている。

Ⅳ 遺　　物

本城跡からは，弥生土器，土師質土器，瓦器，瓦質土器，陶器，磁器，石製品，鉄製品，古銭などが出土した。このうち量的には土師質土器が大半を占め，次いで備前焼を中心とする陶器である。

土師質土器の皿類は，底部の切り離しを糸切りしたものとヘラ切りしたものとが混在しており，広島県西部の安芸国でも，糸切り技法を用いた土器を出土する西条盆地周辺[注1]とは異なった様相を呈している。またこれとともに畿内産と考えられる瓦器の碗と皿が出土した。

広島県西部（安芸国）からの瓦器の出土については今までに８例が報告されており，このうち５例は広島湾岸に位置する[注2]。本城跡は瀬戸内海に面した古代山陽道沿いに立地しており，前例中最西端に位置する。

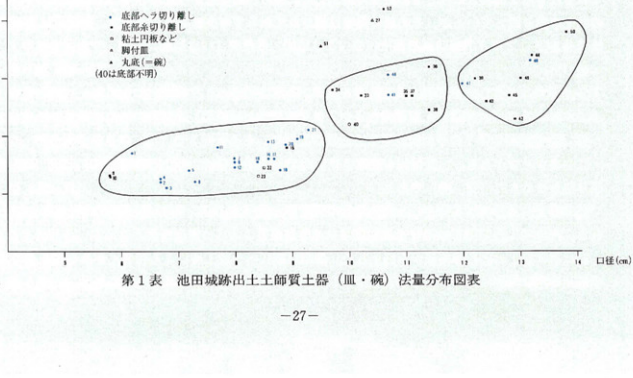
これらのことは，本城跡が瓦器の流通圏域にあるとともに，土師質土器の皿類の底部切り離し技法に糸切りを用いたものを出土する周防地区と，ヘラ切りを用いたものを出土する備後地方[注3]の接点に位置することを示し，土器の流通と土師質土器の製作技法の変遷を考えるうえで示唆に富むものと言うことができよう。なお土器類については個々の特徴を第４表にまとめた。

土師質土器（第25図，第26図，第27図）

皿，碗，鍋がある。坏について，その器形分類には異論のあるところであるが，明解に分類することは困難であり，用途も一様に考えられないことなどから，本稿では皿の一タイプとして扱うこととした。なお，丸底のものを碗とする。

Ⅲ（第25図１～23，第26図33～50，52）

成形技法により，Ａ．底部の切り離しをヘラで行ったもの，Ｂ．底部の切り離しを糸で行ったもの，Ｃ．粘土円盤を貼りつけたものなどに分類し，更に法量により，Ⅰ．口径９cm，器高２cm程度より小さいもの，Ⅱ．口径12cm未満，器高３cm前後のもの，Ⅲ．口径12cm以上，器高４cm未満のものとして，成形技法と法量の組合せで大分類とする。さらに形態，技法に明瞭な差異がみられるものは細分した。（第１表，第３表）



第１表　池田城跡出土土師質土器（皿・碗）法量分布図表

皿AⅠ（1～8，11～14，16～21）

器壁が3㎜前後のものと，5㎜前後のものがあり，概して器壁の薄いものは体部が内湾する。（4～6，8）このうち体部外面下半をヘラで削って成形しているものがあり（5，6，8），このタイプをAⅠ′とすることができる。

器壁の厚いもののうち，体部は直線的で口縁部がやや外反し，肥厚ぎみで端部を丸くおさめるものがあり（14，16～21），このタイプをAⅠ″とすることができる。

皿BⅠ（9，10，15）

9，10は口径6㎝と小さく，口縁部が急激に器壁を減じるのに対し，15は口径9㎝弱で口縁部は体部から次第に器壁を減じ，端部は外反ぎみに終る。これをBⅠ′とすることができる。

皿CⅠ（22，23）

底部内面から体部外面までナデられている。

いずれも底部外面周縁断面形は丸みを帯びている。

皿AⅡ（41，46，47）

各々異なる特徴を有している。口縁部にかけて器壁を減じ，端部は垂直になる41をAⅡ′とし，体部外面下半をヘラ削りし，中位に稜がつく47をAⅡ″とすることができる。

皿BⅡ（33～38，52）

総じて体部は直線的であるが，52は他のものに比べ器高が高く，体部の傾きが小さい。これをBⅡ′とすることができる。

皿AⅢ（48）

48のみである。体部外面下半をヘラ削りし中位に稜がつく。AⅡ″の47と成形技法，形態とも同様であるが，やや大きめのものである。

皿BⅢ（39，42～45，49，50）

39は皿BⅡの特徴を有しているがやや大きめで，BⅢ′とすることができる。42～45は器壁が薄く断面内外面に粘土紐成形による凹凸が顕著にみられ，このタイプをBⅢ″とすることができる。49は小川貴司氏のいう離し糸切り技法と思われる。(注4)

脚付皿（24～27）

いずれも第3郭の2の段と3の段から出土した。脚の内面は右から左の方向へ，数回ヘラで内部の粘土を削り取っているが，その後の調整は施されておらず中央に粘土塊が残る。脚部高は2㎝前後である。

碗（51）

1個体のみ出土した。器壁は3㎜程度で薄い。底部は指頭によって外面から押さえ，窪ませている。いわゆるヘソ皿と称されるもので，2，9，50，52と共に第1号建物跡内から出土した。

鍋（第27図）

二つのタイプがある。口縁端部を肥厚させて丸くおさめるもの（55）と口縁端部を上方，外方へ張り出させるもの（57，59）である。

55は第2郭礫群内から出土し，口縁部のみである。体部は直下に大きく屈曲してつくものと思われる。内外面に炭化物が付着している。

57は第3郭1の段礫群南端から出土した。体部外面にヘラ状工具による押さえがみられる。体部の器壁は薄い。59は第6郭溝付近から出土し，体部外面に多量の煤が付着している。

内耳鍋（58）

内耳は，体部からやや外傾する短めの口縁部上面に，ほぼ垂直に貼りつけられ，径0.9㎝の孔を2つ穿っている。内外面は磨耗もなく，炭化物も付着していないことから未使用品と考えられる。

第6郭溝状遺構内から伏せた状態で，五輪塔の空風輪の直近に出土した。

瓦質土器（第26図，第28図）

碗と鍋，火鉢がある。

碗（53．54）

糸切り離しの平底で粘土紐巻き上げ成形後ナデられているが体部外面は凹凸を残す。内面は丁寧に仕上げられている。胎土は灰褐色で精良である。口縁部のみ黒灰色で全体に灰色を呈し，重ね焼によるものと考えられる。ともに脚付皿と第3郭3の段から出土した。

鍋（56，60）

56は形態，成形調整技法ともに土師質の鍋と同様であるが胎土は灰色で精良であり，堅緻に焼かれている。**60**は口縁部外周に凸帯状の鍔を貼りつけている。内面は丁寧な横方向のハケ目が残る。

火鉢（61，62）

どちらも灰褐色を呈し，焼成はやや軟調である。**61**は口縁部外面上端に右三つ巴文のスタンプが周回する。推定口径34.4㎝である。**62**は脚がつくが何脚かは不明である。残存部は原形の半分と思われる。脚は粘土板貼りつけ後，ヘラで面取り，調整を行っている。底部径30.5㎝を測る。

瓦器（第25図）（**28～32**）

皿と碗がある。**28**は粘土紐貼り付けによる高さ1㎜程度の高台をもっているが形式的手法とも考えられる。器表面の磨耗が著しく調整，暗文などは不明である。**29**は高台がなく，体部内面に幅1㎜程度のヘラ磨きによる暗文が円周方向につけられている。**30**は胎土が精良で口縁端部が外反して尖りぎみに終り，これらの中でタイプの異なるものである。**31**はほぼ完形の皿で幅3㎜程度の暗文が内面口縁端部から底部にまでみられる。暗文はジグザグ状に施されている。**32**も同様である。

図示したものの他に数片の破片が出土しており，瓦器の個体としては10個体程度と思われる。いずれも胎土，形態，暗文など和泉型瓦器に比定できよう。時期的には13世紀後半と考えられる。

なお出土地点については，**30**を除き，第3郭の3つの段から出土している。**30**は第4郭東端に流れ込みの状態で出土した。

陶器（第29図，第30図，第31図）

大半が備前焼で，ほかに瀬戸ないし美濃系，図示していないが唐津系の破片も出土している。

擂り鉢（63～67）

推定口径26～32.7㎝の備前焼で，カキ目は7～10条のものがある。口縁部はいずれも体部からほぼ垂直かやや内傾ぎみに立上り，断面形は波形を呈している。色調は，暗紫茶褐色のものがほとんどで，明赤褐色のもの（**67**）が1個体ある。口縁部の形態など備前焼編年（伊藤）のⅤ期の特徴を有している。**64**，**66**は，口縁部上下に重ね焼の痕が見られる。

壺（68～71）

70のほかは鉢の可能性もある。**69**は赤褐色を呈す備前焼で，胎土，焼成などからⅣ期後半のものと考えられる。ほかも玉緑の形態などからⅣ期後半からⅤ期に属すものと思われる。

大甕（76）

第5郭から出土し，古銭3枚（景祐元寶，紹聖元寶，熙寧元寶）を共伴した。肩部に窯印と見ら

れる「大」を刻んでいる。玉縁は上下に長く，やや内傾する。形態などV期に属すと考えられる。

仏花瓶（76）

瀬戸美濃系で，脚部を除いて黄緑色の釉がかかる。脚部底は糸によって切り離されている。

磁器（第30図）

図示したほか細片が十数片ある。このうち中国青磁の竜泉窯系のものが最も多く見られ，細線蓮弁文を有するものが数種ある。また，いわゆる貓描手と称される櫛描文を内外面に施し，黄緑釉のかかる元代の同安窯系のものが数片ある。**74，75**は竜泉窯系で，釉は変色しており，火を受けた可能性がある。**73**は朝鮮李朝の青磁系の皿で，底部内面と畳付けに重ね焼を行った砂粒が付着している。竜泉窯系のものは元・明のものがあり，12世紀後半～13世紀と16世紀の実年代が与えられよう。朝鮮李朝の青磁系の皿は16世紀後半に位置づけられよう。

石製品（第32図）

硯（80）

第３郭２の段北側から出土した。粘板岩製で，幅は6.6cmである。海部は中央がやや膨らみぎみで，陸部は２段に造り出している。

砥石（77，78）

第４郭１の段北縁と第６郭中央から出土した。いずれも泥岩製で，ある。

五輪石（81，82）

空風輪は第６郭溝内から出土した。水輪は古墓の上層から出土したものである。いずれも花崗岩製で，水輪は風化が著しい。

石鍋（79）

滑石製で第３郭１の段南端から出土した。体部内面は円周方向に磨かれ，外面は縦方向に削られている。推定底径13.9cmである。

鉄製品（第34図，第35図，第36図）

刀子（83，84）

83は第１号土壙から出土したものである。鋒に布と思われるものが錆着している。先幅1.2cmで茎は欠失している。残存長13.7cmである。**84**は第６郭南側で土師質土器（**33**）を共伴して出土した。墳墓の副葬品の可能性もある。棟関は不明瞭であるが，刃関はやや斜めについている。元幅2.7cm残存長21cmを測る平造りの刀子で，茎も残るが目釘孔は見られない。

鉄刀（88）

第２号堀切西側の埋土中から出土した。先幅2.2cm，元幅2.6cm，残存長73.4cmである。鋒から20cmのところで刃部が欠け，刀身が屈曲しているが，使用による破損の可能性がある。

鉄斧（85）

第５号建物跡内から出土した。全長13.4cm，刃部幅4.9cm，頂部幅3.1cm，頂部厚2.9cmを測る。袋部は，縦2.9cm，横1.6cmを測り，内部に木質と鉄片が残る。鉄片は楔と思われる。木質の一方は平坦で柄先と考えられる。

86，87は使途不明の鉄製品である。いずれも茎と思われる部分に木質が錆着し，この部分の断面形は四角形である。先は幅があり薄くなる。

釘

200本あまりの釘類が出土した。長さ12.5cm～2.2cm，径0.7cm～013cmの角釘である。頭部はいわ

ゆる折頭釘と称される，一方へ薄く折りまげたものが大半である。

古銭（第37図，第２表）

31枚出土した。このうち20枚は第２郭から，麻状の繊維を撚り合わせた紐が通り，錆着して塊状に出土した。３枚は第５郭から備前焼の大甕の破片とともに出土した。洪武通寶のうちの１枚は背に「一銭」と鋳出されている。また半分ではあるが鉄銭も１枚出土した。

これらのうち判読可能なものは，開元通寶から朝鮮通寶までで，唐銭３枚，北宋銭18枚，南宋銭１枚，明銭５枚，李朝銭１枚があり，残り３枚は鉄銭と判読不能なものである。

No	銭種	字体	枚数	出土地点	初鋳年	備考
1	開元通寶	隷書	2	第２郭ほぼ中央	唐 621	
		〃	1	第３郭２の段北		
2	淳化元寶	行書	1	第６郭南側	北宋 990	
3	祥符元寶	楷書	1	第２郭ほぼ中央	〃 1008	
4	天禧通寶	楷書	1	〃	〃 1017	
		〃	1	第２郭東端		
5	天聖元寶	楷書	1	第２郭ほぼ中央	〃 1023	
6	景祐元寶	篆書	1	第５郭	〃 1034	
7	皇宋通寶	楷書	2	第２郭ほぼ中央	〃 1039	
8	治平元寶	楷書	1	〃	〃 1064	
9	熙寧元寶	楷書	1	第３郭２の段南	〃 1068	
		〃	1	第５郭		
10	元豊通寶	行書	1	第２郭ほぼ中央	〃 1078	
11	元祐通寶	行書	1	第２郭ほぼ中央	北宋1086	
12	紹聖元寶	篆書	2	〃	〃 1094	
13	〃	行書	1	〃	〃	
		〃	1	第５郭		
14	聖宋元寶	篆書	1	第２郭ほぼ中央	〃 1101	
15	淳熙元寶	楷書	1	〃	南宋1174	
16	洪武通寶	楷書	2	〃	明 1368	背に「一銭」を鋳出す
17	永楽通寶	楷書	3	〃	〃 1408	
18	朝鮮通寶	楷書	1	〃	李朝1423	
19	□□□寶		1	〃	不明	
20	（鉄銭）		1	第３郭２の段南		
21	不明		1	第３郭１の段南		

第２表　池田城跡出土古銭一覧表

弥生土器（第38図）

89は第４郭南側斜面で表採したものである。**90**は第４郭１の段の南端に流れ込みの状態で出土した小片を復元したものである。

89は逆Ｌ字状口縁を有する甕の上部である。口縁部は貼りつけで，指頭圧痕が外面にみられ，後ナデられている。口縁端部にヘラ状工具による刻み目を施し，口縁部外面下半には凸帯を張りつけ布目の押捺文を施している。胴部外面下半の調整は不明である。口縁部内面は横位のハケ目調整を施し，端部は上面とともにナデられている。口縁端部内周部分はつまみ出され，内面がわずかに窪む。胴部内面は横位のヘラ磨き痕がみられる。推定口径28.3㎝で胴はあまり張り出さない。口縁部などは土居窪３式に類似した特徴を有しているといえよう。[注６]

90は甕で，口縁部はくの字状を呈し，上面は断面形でゆるいカーブを描く。端部はやや肥厚ぎみに終り，浅い一条の凹線が巡る。胴部上半に最大７本単位の櫛歯状工具による刺突文が施されている。外面は胴部上端から$\frac{1}{3}$あたりまでハケ目調整が施され，それより下はヘラ磨きで，底部付近では磨き幅が４㎜前後と広くなる。胴部上半で最大径21.4㎝を測り，器壁は３㎜前後と薄い。底部を欠失しているが，器高は30㎝前後と思われる。内面はヘラ磨きの痕がわずかに残るが，丁寧に仕上げられている。

施文，口縁部の形態，調整技法など中期の特徴を残していると言えよう。[注７]

小　結

本城跡からは弥生土器から陶磁器類まで多様な土器類が出土した。このうち大半をしめる土師質の皿類については分類を試みたが，時期差をも勘案したものではない。広島県西部の安芸地方，特に広島湾岸における土師質土器は資料も少なく，編年分類は確立されていない。本城跡出土の土師質土器も資料とするには少量であり，推論の域を出ないが，これらの時期的考察を試みてみたい。出土遺物のうち，次のものは類例などから時期を比定することができる。

脚付皿（**24**～**27**）は近在の類例を寡聞にして知らないが，讃岐国分寺跡[(註8)]にわずかにみられる。また草土千軒町遺跡でも技法的にはやや異なるが脚付皿としているものの出土例があり[(註9)]，これらから12ないし13世紀の年代が与えられよう。これと共伴した瓦質の碗（**53**・**54**）は同種のものが備前焼の窯跡から出土し，備前焼の一種として14世紀前半のものと考えられている。備前焼は，摺り鉢，大甕，壺のほとんどがⅣ期後半以降に属し，15世紀後半から16世紀末頃までの年代が与えられよう[(註10)]。

土師質土器については，碗（**51**）は草土千軒町遺跡[(註11)]，大塚土居前遺跡[(註12)]などにみられ，15世紀から16世紀と考えられよう。また皿ＢⅢ′は大内氏館跡[(註13)]から多く出土する薄手のものに近似し，下限を16世紀中頃と考えられる。鍋類については，口縁部の形態など春日南遺跡[(註14)]の第Ⅱ期のものに類例がみられ，16世紀前半頃と考えられる。このほか鏡西谷遺跡[(註15)]などで土師質土器の皿類の形態分類を行い時期的な考察も行われている。土師質土器は在地性の強いものではあるが，備後と安芸で類似し

底部切離し	法量	形態技法	図番号	特徴	胎土色調	共伴関係	備考
A類（ヘラ切り）	Ⅰ		1，2，3，4 7，11，12，13	器壁厚い	粗		第1号建物跡内**2**
		Ⅰ′	5，6，8	器壁薄い，体部下半ヘラ削り	精良 黄褐色		第3郭3の段
		Ⅰ″	14，16，17，18 19，20，21	器壁厚い，体部直線的，口縁部外反，肥厚ぎみ，端部丸い	粗 赤褐色		
	Ⅱ		46		精良淡 黄褐色		
		Ⅱ′	41	口縁部に向って器壁薄い 端部垂直ぎみ	精良 黄褐色		
		Ⅱ″	47	体部外面下半ヘラ削り成形後ナデ外面中位に稜	精良 乳白色	Ⅰ期	第3郭3の段
	Ⅲ		48	体部外面下半ヘラ削り成形後ナデ外面中位に稜	精良 赤褐色		**47**の大形Ⅰ期か
B類（糸切り）	Ⅰ		9，10	口径6㎝	粗 赤褐色	Ⅱ期 **10**	第1号建物跡内**9**
		Ⅰ′	15	体部内湾，口縁端部外反 口縁部に向って器壁薄い	良　淡 黄褐色		
	Ⅱ		33，34，35，36 37，38	体部直線的で外傾，口径に比し底径が小さい，器壁厚め	やや粗 淡赤褐色		
		Ⅱ′	52	器高高い，体部直線的，傾き小さい	精良 淡灰褐色		第1号建物跡内
	Ⅲ		49，50	器壁厚め			第1号建物跡内**50**
		Ⅲ′	39	ＢⅡに同じ，やや大形			
		Ⅲ″	42，43，44，45	器壁薄い，体部外傾，口径に比し底径が小さい	精良 淡褐色	Ⅱ期 **45**	第3郭2の段裸群
C類	Ⅰ		22，23	底部外面丁寧な仕上げ	精良		

第3表　池田城跡出土土師質土器（皿）分類表

た点もあり，これらを参考とすることは許されよう。なお仏花瓶（**76**）は17世紀のものと思われ，図示していないが17世紀前半の唐津系の破片も出土している。

さて，本城跡出土の土器類は，脚付皿（**24～27**）を上限とし，瓦器，瓦質の碗を下限とする，12ないし13世紀から14世紀前半に属するものと，備前焼を中心とする15世紀後半から16世紀のものとに大別できる。前者をⅠ期，後者をⅡ期とする。これらとの共伴関係を見てみると，Ⅰ期のものとⅢA″とした**47**が共伴している。Ⅱ期については**ⅢBⅠの10**，**ⅢBⅢ″の45**が備前焼の**64**，**66**と共伴して出土している。

これらをさらに形態，技法，出土地点などから，他の個体と総合的に関連づければ，体部下半をヘラで成形する，AⅠ′，AⅡ′，AⅢをⅠ期に，BⅠ，BⅢ′をⅡ期に比定することができよう。また第1号建物跡内から，ヘラ切りのものと糸切りのものが出土し，碗（**51**）と共伴していることからⅡ期とし，同時期に両技法のものが混在した可能性が考えられよう。

以上のことから，さらにこのほかのタイプについて類推することもできようが，あまりにも資料が少なく，タイプとして認定するには危険が多いと考える。

以上，おおきくⅠ期，Ⅱ期に属するものとして分類した。結果的には，A類のものがB類のものよりも時期的に遡ることが考えられ，B類の出現後も技法として残り，B類と共存する可能性をもつと言うことができよう。しかし，このことが本城跡付近の土師質土器製作技法の変遷を示すものか在地性の強い土師質土器が商品として流通した実態の一端を示すものかは明言することができない。

いずれにしても，広島県西部，特に広島湾岸の土師質土器の分類，編年については，今後の資料の蓄積を待って，さらに比較検討を加え，確立していく必要がある。

注

（1）道照遺跡，鏡千人塚遺跡などがある。

広島県教育委員会　（財）広島県埋蔵文化財調査センター　『道照遺跡　西条バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』　1982

広島県教育委員会　（財）広島県埋蔵文化財調査センター　広島大学　『広島大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査報告　清水奥山遺跡　東ガガラ窯跡　鏡千人塚遺跡』　1982

（2）安芸国分尼寺跡（東広島市西条町所在）　広島県教育委員会　『安芸国分尼寺跡　第2次調査概報』　1979

道照遺跡（東広島市西条町所在）　注（1）に同じ

鏡西谷遺跡（東広島市西条町所在）　広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会　『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』　1982

畝観音免第1号古墳（安芸郡海田町所在）　広島県安芸郡海田町教育委員会　『畝観音免古墳群』　1979

太田川放水路遺跡（広島市中区所在）　広島市　『新修広島市史』第1巻　1961

比治山第2貝塚（広島市南区所在）　広島県教育委員会　『広島県史蹟名勝天然記念物調査報告』第6集　1954

下岡田遺跡（安芸郡府中町所在）　広島県安芸郡府中町教育委員会　『下岡田遺跡発掘調査概報』　1965年度　1966年度　1966，1967

石井城第2号遺跡（安芸郡府中町所在）　広島県安芸郡府中町　『安芸府中町史』第2巻　資料編　1977

これらのうち東広島市所在の遺跡以外は広島湾岸に位置する。

なお，川越俊一　「中・四国地方の瓦器―特に広島県下出土例を中心として―」　芸備友の会　『芸備』

第11集所収　で他の出土例とともにこれらについてまとめられている。

（3）鈴木康之　「広島県における中世土師器について」日本中世土器研究会　『中近世土器の基礎研究』　1985年10月所収　などで両地方の差異が指摘されている。

（4）小川貴司　「回転糸切り技法の展開」『考古学研究』101　1979所収

（5）岡壁忠彦・岡壁寂子　「備前焼研究ノート（1）～（3）」『倉敷考古館研究集報』第1号，第2号，第5号所収　以下備前焼の時期についてはこの編年による。

（6）岡本健児　「13　愛媛県土居窪遺跡」『日本農耕文化の生成』　日本考古学協会編　1961所収　弥生時代前期後半の阿方式土器に次ぐ中期のものであるとされている。

（7）広島県教育委員会　（財）広島県埋蔵文化財調査センター　『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅰ）』　1983所収　の助平2号遺跡出土のものに類例が見られ，同書及び藤野次史　「鏡西谷遺跡の弥生土器」広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会　『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』　1984所収　付編Ⅰ　などにより中期後半に編年されている。

（8）国分寺町教育委員会「特別史跡讃岐国分寺跡昭和59年度発掘調査概報」　1985

（9）広島県草土千軒町遺跡調査研究所　松下正司所長のご教示による。

（10）倉敷考古館　間壁忠彦氏のご教示による。

（11）広島県草土千軒町遺跡調査研究所　『草土千軒町遺跡』　18～21次　1977　により土師質土器の編年がなされ，同種の碗が14世紀～15世紀に比定されている。

（12）建設省福山工事事務所　（財）広島県埋蔵文化財調査センター　「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅱ）」　1984

（13）山口市教育委員会　『大内氏館跡Ⅰ～Ⅴ』　1980～1983

（14）注（12）に同じ

（15）広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会　『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』　1982

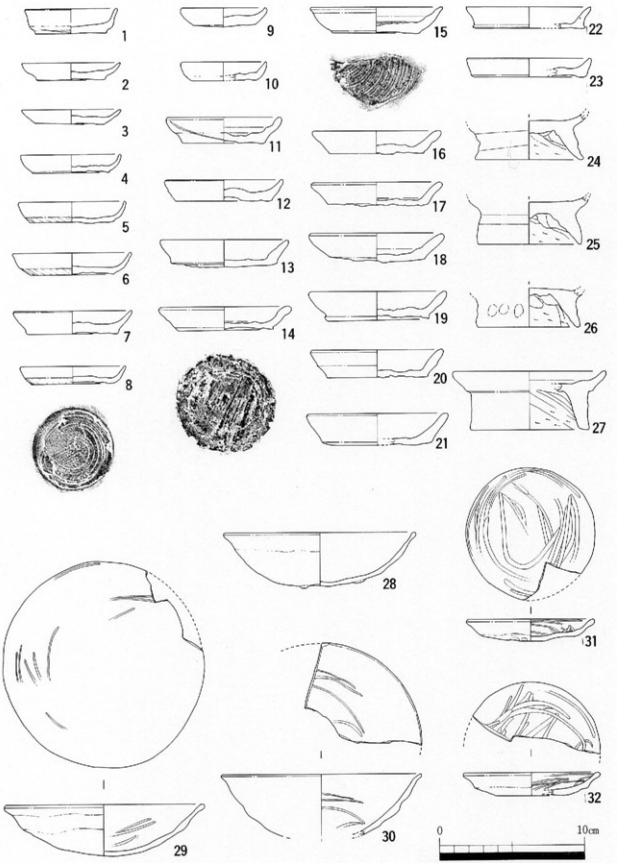
第4表　池田城跡出土土器類観察表

器種		図面番号	口径(mm)	器高(mm)	底部切り離し技法	成形・調整	形態	備考	ロクロ回転	出土地点
土師質土器	皿AⅠ	1	62	17	回転ヘラ切り	底部内面乱方向ナデ，体部内外面共ロクロナデ	体部は内湾して立ち上り，口縁部は外反気味に終る	内面赤褐色，外黄褐色口縁端部に煤付着，底部外面ヘラ切り込み痕	右	第4郭2の段東側
	皿AⅠ	2	67	12	回転ヘラ切り	底部内面乱方向ナデ，体部内外面共ロクロナデ	体部内湾気味，口縁端部尖る	淡褐色，胎土精良焼成やや軟	左	第3郭礎石建物内
	皿AⅠ	3	68	11	回転ヘラ切り	磨耗著しく内面不明，外面ロクロナデ	内湾気味，不整形	明黄褐色，1mm大の砂粒を比較的多く含む	左	第3郭3の段南端
	皿AⅠ	4	67	12.5	回転ヘラ切り	体部内外面共ロクロナデ	体部内湾する，器壁薄い	淡黄褐色，内面底部灰褐色，胎土精良，焼成やや軟	左	第3郭2の段東端
	皿AⅠ′	5	72	14	回転ヘラ切り，板目痕	底部内面乱方向のナデ，体部内外面共ロクロナデ，体部下半ヘラケズリ後ナデ	完形，体部内湾，器壁薄い	淡黄褐色，胎土精良，焼成良，口縁端部～底部外面煤付着	左	第3郭3の段南側
	皿AⅠ′	6	80	15.5	回転ヘラ切り	内外面共ロクロナデ，体部下半はヘラケズリ後ナデ	体部内湾気味，器壁薄い	淡褐色，砂粒を比較的多く含む，焼成良	左	第3郭2の段西側
	皿AⅠ	7	80	16	回転ヘラ切り	底部内面渦巻状ナデ，体部内外面ヨコナデ	体部内湾気味，口縁端部尖り気味	内面黄褐色，外面茶褐色，焼成やや軟，胎土比較的精良	左	第3郭1の段中央
	皿AⅠ′	8	73	12	回転ヘラ切り，板目痕	底部内面乱方向のナデ，体部内外面共ヨコナデ，体部下$\frac{1}{3}$はヘラケズリ後ナデ	完形，体部内湾，器壁薄い	黄褐色，胎土精良，焼成良，口縁端部～底部外面周辺部に煤付着	左	第3郭3の段南側
	皿BⅠ	9	58	13	糸切り	底部内面ロクロナデ，外面ヨコナデ	体部内湾気味，不整形，底部器壁厚い	赤褐色，胎土2mm大までの砂粒を多く含む，焼成やや軟	不明	第3郭礎石建物内
	皿BⅠ	10	58	13	糸切り，板目痕	体部内外面共ロクロナデ，底部内面乱方向ナデ	体部内湾，口縁端部尖り気味に終る	赤褐色，3mm大の砂粒を含む，焼成良	不明	第3郭2の段礫群内
	皿AⅠ	11	77	18	回転ヘラ切り	内外面共ロクロナデ	内面中位に稜，器壁厚い，口縁部は内湾する端部は丸くおさめる，内面凹凸が著しい	淡褐色，胎土，細砂粒を僅かに含むが比較的精良，焼成良	右	第3郭3の段南側
	皿AⅠ	12	80	14.5	回転ヘラ切り	底部内面乱方向ナデ，体部内外面共ロクロナデ	体部内湾気味，端部やや肥厚	茶褐色，砂粒を僅かに含む，焼成良	左	第3郭2表土中
	皿AⅠ	13	86	19	回転ヘラ切り，板目痕	体部内外面ロクロナデ，内面底部体部の境指頭痕，底部内面乱方向ナデ	体部直線的，口縁端部細る	淡褐色，胎土，砂粒を比較的多く含む，焼成良	左	第6郭南側
	皿AⅠ″	14	86	16	回転ヘラ切り，板目痕	体部内外面共ヨコナデ，底部内面乱方向ナデ	口縁部外反，器壁厚い端部は丸くおさめる	赤褐色，砂粒多含，底部～口縁部外面煤付着	右	第3郭2の段西側
	皿BⅠ′	15	89	18	糸切り	粘土紐巻上げ底を破断面に観察，内外面共ロクロナデ	体部内湾気味，口縁端部外反気味に終る，内面に凹凸が見られる	内面黄褐色，外面淡赤褐色，胎土僅かに砂粒を含む，焼成良好	左	第3郭1の段東側
	皿AⅠ″	16	84	15.5	回転ヘラ切り，板目痕	底部内面乱方向ナデ，体部内外面共ヨコナデ	口縁部外反気味で肥厚し，端部は丸くおさめる	赤褐色，5mm大の砂粒多含，焼成良	右	第1郭北側西
	皿AⅠ″	17	87	16	回転ヘラ切り	体部内外面共ヨコナデ	口縁部外反気味，器壁厚い	赤褐色，胎土精良，焼成良，口縁端部入底部外面煤付着外面一部暗褐色，胎土3mm大の砂粒を多く含む	右	第6郭北側
	皿AⅠ″	18	88	14	回転ヘラ切り，板目痕	底部内面ヨコナデ，体部内外面共ロクロナデ	体部直線的，器壁厚い	赤褐色，細砂粒を含む，焼成良	右	第7郭北側
	皿AⅠ″	19	91	19.5	回転ヘラ切り	底部内面指頭による調整痕乱方向ナデ，体部内外面共ロクロナデ	口縁部肥厚，器壁厚い	暗赤褐色，口縁部半周に煤付着，胎土5mm大までの砂粒多含	右	第3郭2の段東側北
	皿AⅠ″	20	89	18.5	回転ヘラ切り	体部内外面ヨコナデ，内面磨耗	体部直線的，器壁厚い，外面中位に稜	赤褐色，胎土細砂粒を多含，焼成やや軟	左	第6郭南側

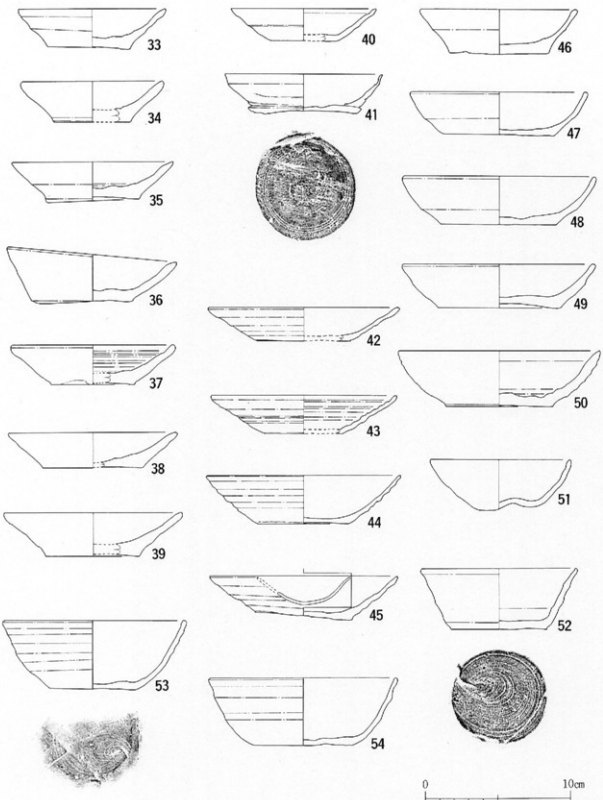
器種	図面番号	口径(mm)	器高(mm)	底部切り離し技法	成形・調整	形態	備考	ロクロ回転	出土地点
土師質土器	皿AⅠ'	21	93	21	回転ヘラ切り	底部内面乱方向ナデ、体部内外面共ヨコナデ	体部直線的、口縁部やや肥厚、器壁厚い	内外面共茶褐色～赤褐色、胎土5㎜大の砂粒含む	右	第6郭南側表土中
	皿CⅠ	22	85	14.5		体部外面共ヨコナデ、内外面共ていねいな仕上げ	体部外反気味、端部は器壁が薄くなるがやや肥厚、底部外周張出す	内外面共黄褐色、焼成良、胎土精良		第4郭2の段南東
	皿CⅠ	23	84	13		体部外面ヨコナデ	体部ほぼ垂直気味	内面黄褐色、外面暗褐色、胎土比較的精良、焼成やや軟		第7郭表土中
	皿BⅡ	33	102	27	糸切り	底部内面不明、体部内外面共ヨコナデ	不整形、楕円形、体部直線的に立上る、口縁肥厚	淡赤褐色～黒褐色、砂粒を比較的多く含む、焼成軟	左	第6郭南側
	皿BⅡ	34	97	28	糸切り	内面ヨコナデ、外面磨耗、調整不明	体部直線的、口縁部肥厚、器壁厚い	淡赤褐色、細砂粒を多含、焼成やや軟	不明	第4郭1の段礫群辺
	皿BⅡ	35	110	27	糸切り	内面ロクロナデ、外面磨耗、調整不明	体部直線的	淡褐色、砂粒を僅かに含む、焼成良	右	第2郭礫群内
	皿BⅡ	36	114	32	糸切り	体部外面ヨコナデ、内面磨耗、調整不明	不整形、体部直線的、口縁部肥厚	淡黄褐色、胎土僅かに砂粒を含む、焼成良	不明	第6郭南側
	皿BⅡ	37	111	27	糸切り	体部内面ロクロナデ外面磨耗、調整不明	体部直線的、口縁部内湾	細砂粒を多含、焼成やや軟淡赤褐色	右	第6郭南側
	皿BⅡ	38	114	24.5	糸切り	体部内外面ヨコナデ	体部直線的、内面底部と体部の境不明瞭	淡赤褐色～灰褐色、胎土2㎜大までの砂粒を多含、焼成やや軟	右	第4郭1の段礫群付近
	皿BⅢ'	39	122	30	糸切り	体部下半ヨコナデ、それ以外磨耗、調整不明	体部直線的、内面底部と体部の境不明瞭	淡赤褐色、細砂粒を多含、焼成やや軟	不明	第4郭1の段礫群辺
	皿Ⅱ	40	100	22	不明	体部内面ヨコナデ、外面磨耗、調整不明	体部直線的、口縁部やや内反、体部外面中位に鈍い稜	外淡黄白色、内淡黄褐色、胎土比較的精良、焼成良	右	第6郭北側
	皿AⅡ'	41	107	27	回転ヘラ切り、板目痕	体部内外面共ロクロナデ、底部内面乱方向ナデ	体部内湾気味に立上り、口縁端部はほぼ垂直気味、端部平坦	淡黄褐色、細砂粒を多含、体部下半からヘラの切り込み痕	右	第4郭1の段西側
	皿BⅢ'	42	129	23	糸切り	内外面共ロクロナデ	体部直線的、口縁部内湾気味肥厚、器壁薄い	淡黄白色、胎土精良、焼成良	不明	第3郭1の段
	皿BⅢ'	43	124	26	糸切り	内外面共ロクロナデ	体部直線的、口縁端部内湾、上面平坦、器壁薄い	淡黄褐色～黄褐色、胎土比較的精良	右	第3郭2の段西側
	皿BⅢ'	44	132	34	糸切り	内面磨耗、体部外面共ロクロナデ	体部やや内湾気味、口縁端部平坦、器壁薄い	乳灰白色、胎土比較的精良	右	第6郭北側
	皿BⅢ'	45	128	27	糸切り	体部内外面共ロクロナデ	体部直線的、口縁部内湾し肥厚、器壁薄い	淡褐色～赤褐色、胎土砂粒僅含、口縁一部平円形に削りとる	右	第3郭2の段礫群内
	皿AⅡ	46	107	30.5	回転ヘラ切り、板目痕	体部内外面共ロクロナデ、底部内面乱方向ナデ	体部外面中位に稜、体部内湾気味、口縁端部肥厚、底部器壁厚い	内面淡黄褐色、外面淡褐色、胎土精良、焼成やや軟	左	第6郭北側
	皿AⅡ'	47	120	29	回転ヘラ切り	体部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ、体部下半はヘラケズリ後ナデ	体部中位に稜、内湾気味、ほぼ完形	淡白色、砂粒を僅かに含、焼成良	左	第3郭3の段北側
	皿AⅢ	48	132	33	回転ヘラ切り	内面底部乱方向ナデ体部内面ヨコナデ、外面ヨクロナデ、体部外面下半ヘラ削り	体部中位に稜、口縁部内湾気味	赤褐色、砂粒を僅かに含む、焼成やや軟	左	第3郭2の段北側東
	皿BⅢ	49	130	30	糸切り	体部内外面、底部内面ともロクロナデ、底部周縁ベラ治工具におけるナデあげ	体部内湾気味	内面赤褐色、外面黄褐色～一部暗褐色、焼成良	左	第4郭2の段東端
	皿BⅢ	50	138	38	糸切り	内外面共ロクロナデ	体部内湾する、口縁部肥厚し、端部尖り気味、器壁厚い	淡黄褐色	右	第3郭礫石確物内
	皿BⅡ	52	106	42	糸切り	体部内外面共ロクロナデ	体部直線的に立上る、口縁部外反気味、端部内傾	淡灰褐色、胎土精良、焼成やや軟	右	第2郭礫石確物内
	脚付皿	24	(84)	(36)		底部内面乱方向ナデ、脚部外面ヨコナデ、脚部内面ヘラ削り	口縁部欠失、体部内湾気味、脚部高2.2㎝	赤褐色、胎土3㎜大の長石粒を含むが比較的精良	不明	第3郭2の段西側

器種		図面番号	口径(cm)	器高(cm)	底部切り離し技法	成形・調整	形態	備考	ロクロ回転	出土地点
土師質土器	脚付皿	25	(88)	(39)		底部内面乱方向ナデ，脚部外面ヨコナデ，脚部内面ヘラ削り	口縁部欠失，内湾気味に立ち上る，脚部断面三角形状，脚部高2cm	赤褐色，胎土精良，焼成やや軟	不明	第3郭3の段北側
	脚付皿	26	不明	不明		底部内面乱方向ナデ，脚部外面ヨコナデ，脚部外面指頭痕，脚部内面ヘラ削り	口縁部欠失，脚部垂直気味，断面三角形，脚部高1.7cm	赤褐色，胎土精良，焼成やや軟	不明	第3郭3の段北側
	脚付皿	27	104	40		体部内外面共ロクロナデ，脚部外面ヨコナデ，脚部内面ヘラ削り	体部内湾気味，器壁厚い，断面逆台形，脚部高2.5cm	淡茶褐色，胎土精良，焼成やや軟	不明	第3郭3の段北側
	碗	51	95	35.5	丸底	底部外面からの指圧による窪み	体部やや内湾気味，不整形	淡黄褐色～乳白色，砂粒多含	不明	第3郭遺石建物内
	鍋	55	228	不明		口縁部のみ，内面ヨコ方向ハケ目，上半ヨコナデ，外面下半指頭による押さえ	口縁部いったん外反し内湾，端部肥厚	黄褐色～黒灰色，内外面炭化物付着，胎土，細砂粒を含む，焼成良		第2郭礫群内
	鍋	57	294	(210)		底部内面乱方向ハケ目，体部～口縁部内面ヨコハケ目，口縁端部上面～口縁部外面ヨコナデ，口縁部下半指頭痕，体部外面ヘラ状工具の押さえ体部外面下半指頭痕底部外面周縁幹方向ハケ目，底部外面中央部ヘラ状工具による押さえ	口縁部外反しゆるく内湾，端部肥厚し外へ少し張り出す	赤褐色～黄褐色，口縁部外面一部黒灰色，胎土精良		第3郭2の段礫群内
	鍋	59	305	不明		内面ヨコ方向ハケ目口縁端部ヨコナデ外面口縁部～体部タテ方向ハケ目，体部下端ヨコ方向ハケ目	口縁部外反し肥厚，端部上方へやや張り出す	内面黄褐色，外面暗褐色，体部外面に多量の煤付着		第6郭溝中央溝付近
	内耳鍋	58	320	(198)		内面ヨコ方向ハケ目口縁部ヨコナデ，外面口縁部境下半タテ方向斜のハケ目，底部外面周縁ヘラ削り，内耳貼り付け，内耳孔上から下へ棒状工具で抜く	口縁部外反し肥厚，端部に凹線が巡る。底部欠失	内外面黄褐色		第6郭溝中央内
瓦質土器	碗	53	126	48	糸切り	底部内面体部内外面ロクロナデ	体部は内湾気味，口縁端部は肥厚し上面平坦	全体に灰色，口縁部は黒灰色，胎土精良，焼成良好	右	第3郭3の段北側
	碗	54	126	46	糸切り	底部内面体部内外面ロクロナデ	体部内湾気味，口縁端部は平坦	全体灰色，口縁部は黒灰色，胎土精良，焼成良好	右	第3郭3の段北側
	鍋	56	290	不明		内面ヨコ方向ハケ目口縁端部ヨコナデ口縁部外面ヨコハケ目，斜方向ハケ目頸部外面に指頭痕体部タテ方向ハケ目	口縁部外反しゆるく内湾，端部肥厚し，上と外へ張り出す。	暗灰色，胎土精良，焼成堅緻		第4郭2の段礫群内
	鍋	60	286	不明		体部内面ヨコ方向ハケ目後軽いヨコナデ口縁部ヨコナデ，体部外面粗いハケ目後指頭によるヨコナデ	器壁厚い，鍔は垂れ下り気味につけられた丸い	黒灰色，内外面に煤付着。胎土2～3mm大の砂粒を多含		第3郭3の段北端東
	火鉢	61	344	不明		内面ヨコナデ，外面凸帯は削り出し。断面台形～半楕円形，面平坦面はヘラによる削りか。	口縁部外面上端に「右回り三つ巴文」の型押し	灰褐色，胎土精良，焼成やや軟		第4郭1の段西側
	〃	62	底径305	不明		脚付であるが，何脚かは不明。貼り付け脚部外面へ方削り後面取り，体部内面に指頭圧痕が4列見られる。	体部は徐に内湾しながら，少し外へ開く。足ははば垂直で，体部の器壁よりも薄い。貼り付け力，瓦の残存部の対称形が歪形か。	灰褐色，胎土精良，焼成やや軟		第6郭南側及び第1号掘切内
瓦器	高台付碗	28	131	37		高台は粘土紐貼りつけ後，押さえ。内外面共磨耗調整不明	体部内湾，口縁端部肥厚し丸くおさめる。体部外面に鈍い稜	内面黒灰色，外面灰褐色，口縁部黒灰色，重ね焼と推定される。細砂粒を多含		第3郭2の段西側
	碗	29	135	35		口縁部～体部内面に円周方向の暗文口縁部内外面共ヨコナデ	体部内湾，口縁部やや外反気味，端部丸くおさめる。体部外面中位に鈍い稜	灰色，3mm大までの長石粒を多含外面～底部褐色，重ね焼の痕		第3郭段3の段北側

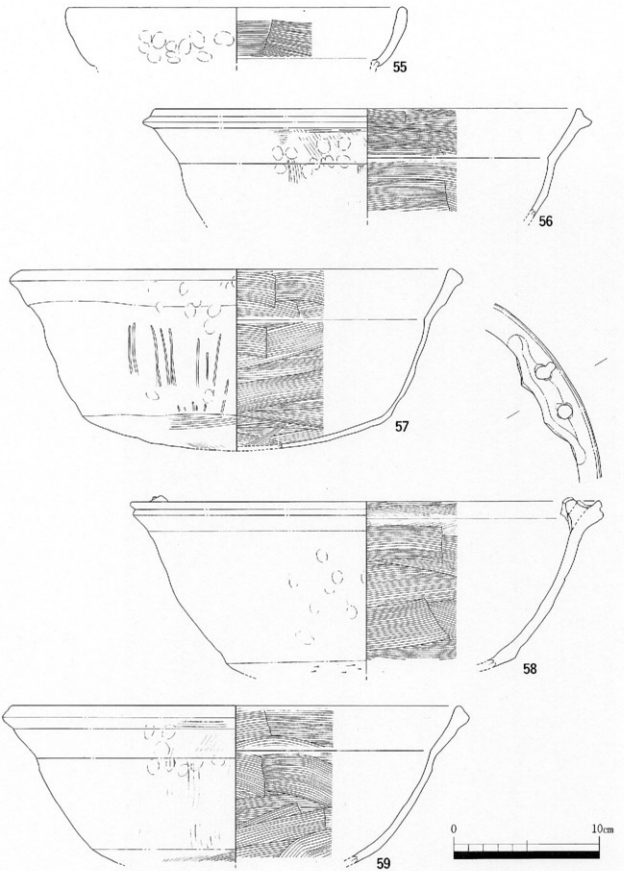
器種		図面番号	口径(mm)	器高(mm)	底部切り離し技法	成形・調整	形態	備考	ロクロ回転	出土地点
瓦器	碗	30	136	不明		内面ていねいなナデ 口縁部ヨコナデ 内面円周方向の暗文 高台不明	体部内湾，口縁部直線的，端部外反し尖る。 ほぼ完形	内面黒灰色，外面体部中位下半灰白色，口縁部黒灰色 胎土精良，焼成良		第4郭 表土中
	皿	31	86	15		口縁部内外面共ヨコナデ，底部外面指圧痕，口縁端部～底部内面乱方向暗文	口縁部直線的，端部肥厚し丸くおさめる。 ほぼ完形	黒灰色，内面一部灰褐色，2mm大の長石粒を含む		第3郭 1の段 東南端
	皿	32	92	(15.5)		口縁部内外面共ヨコナデ口縁端部～底部内面乱方向暗文	体部内湾，口縁部外反気味に終る。端部やや肥厚し丸くおさめる。	内面黒灰色，外面灰白色～黒灰色，胎土精良，焼成良		第3郭 1の段 東南端
陶器（備前焼）	擂鉢	63	281	不明		体部内外面共ロクロナデ，口縁部ヨコナデ	口縁部やや内傾，口縁部外面下端は少し下方へ張り出す。体部くの字状，カキ目不明	体部内外面茶褐色，口縁部外面暗褐色，内外面に黄白色自然粗		第6郭 南側
	擂鉢	64	327	不明		体部内外面共ロクロナデ，口縁部ヨコナデ	口縁部垂直気味，断面波形，上端部は外反気味，下端部は外へ張り出す。カキ目は7条	暗茶褐色，口縁部外面艶を有す。口縁部外面下端に重ね焼痕		第3郭 2の段 礫群付近
	擂鉢	65	255	不明		体部内外面共ロクロナデ，口縁部ヨコナデ		内面体部下半灰褐色，体部上半～口縁部黒灰色，外面体部茶褐色，口縁部艶を有す暗茶褐色		第6郭 南側
	擂鉢	66	300	117		底部内面，体部内外ロクロナデ，口縁部ヨコナデ，底部外面不調整	口縁部やや内傾，上端部は平坦で外上方へ張り出す。下端は外方へやや張る。カキ目は10条下から上へゆるく弧を描く，内面凹凸	内面茶褐色，外面暗褐色，底部の器壁は体部よりも薄い，口縁部上下に重ね焼痕，未使用と思われる。		第3郭 2の段 礫群内
	擂鉢	67	261	115		底部外面を除き全面ロクロナデ 底部外面外周部に粘土ナデアゲが一部見られる。底部外面不調整	体部はやや外反気味，口縁部やや内傾，カキ目，条下から上へゆるく弧を描き一部口縁部にかかる	明黄褐色～灰褐色		第6郭 南側
	壺	68	底径117	不明		体部内外面共ロクロナデ，底部外面不調整	体部の立上り部分に明瞭な塗みが巡る。指頭痕か	内面茶褐色，外面艶のある暗褐色		第3号 堀切内
	壺	69	底径190	不明		体部内外面共ロクロナデ，底部外面不調整	体部は開き気味に立ち上る。底部内面周縁に明瞭な凹線が巡る	赤褐色，粘土精良		第6郭 南側
	壺	70	107	不明		体部から口縁部内外面共ロクロナデ	口縁部は直立し，やや内傾する。端部は外方へ少し張り出し，上面が傾斜する。	暗褐色，胎土細砂粒を比較的多く含む，口縁端部上面体部外面に黄褐色釉（自然釉）が見られる		第6郭 北側
	壺	71	底径133	不明		体部内外面共ロクロナデ，底部外面不調整，足部貼りつけ後指頭による成形	肩部で最大径をもち，内湾する	内面茶褐色，外面艶のある暗赤褐色肩部及び内面の一部に黄褐色釉（自然釉）が見られる		第6郭 南側
	大壁	72	472	不明		内外面共ハケによるナデ，頸部内面にはハケによる押さえとナデが斜方向にみられる。口縁部内外面共ヨコナデ	口縁部は内傾し，玉縁は上下に長い，肩部は張っている	内面茶褐色，外面艶のある茶褐色外面黄褐色釉（自然釉）が一部かかる。肩部に「才」を刻む。古銭を伴出		第5郭
陶器	仏花瓶	76	底径56	不明		内外面ともロクロナデ，底部糸切り	上部はラッパ状に開くと思われる	胴部下半・脚部外周面に黄緑釉，瀬戸美濃系		第8郭
磁器	皿	73	不明	不明		体部外面ロクロナデ高台削り出し，高台内部ヘラ削り，畳付けを除き全体に青灰色の釉がかかる	高台断面台形，見込底部及び畳付けに4，5か所の砂粒班が見られる	釉青灰色，素地灰色～明茶褐色，胎土細砂粒を多く含む，灰色		第5郭
	碗	74	不明	不明		高台削り出し，高台内部ヘラ削り，畳付両角ヘラによる面取り，高台を除き釉	高台断面五角形 体部内湾して立上る	釉青灰色，素地灰色，見込み中央に文様		第3郭 3の段
	碗	75	不明	不明		高台削り出し，高台内部ヘラ削り，畳付両角ヘラによる面取り，一部高台外面に釉が及ぶ	高台断面五角形 体部内湾して立上る	釉は内面白緑色，外面白黄褐色，素地赤褐色，見込中央に文様，菊花か		第3郭 2の段



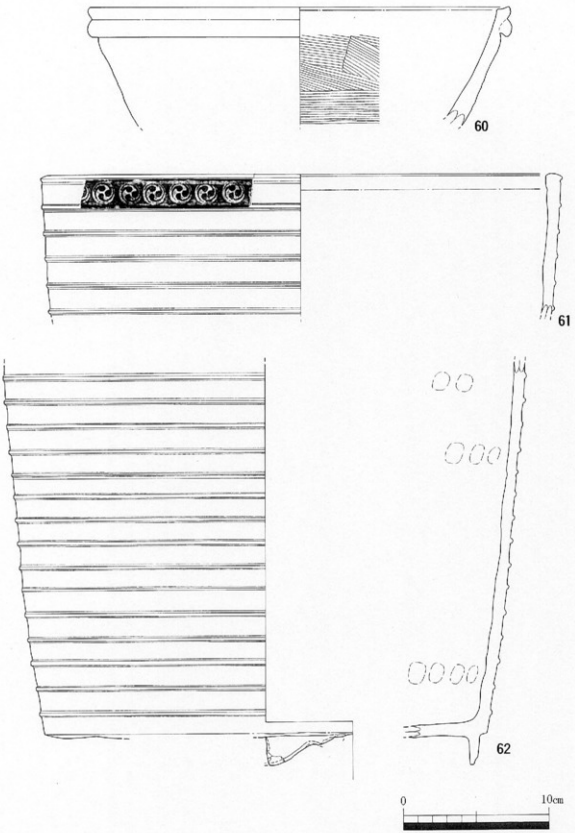
第25図　出土遺物実測図（1）



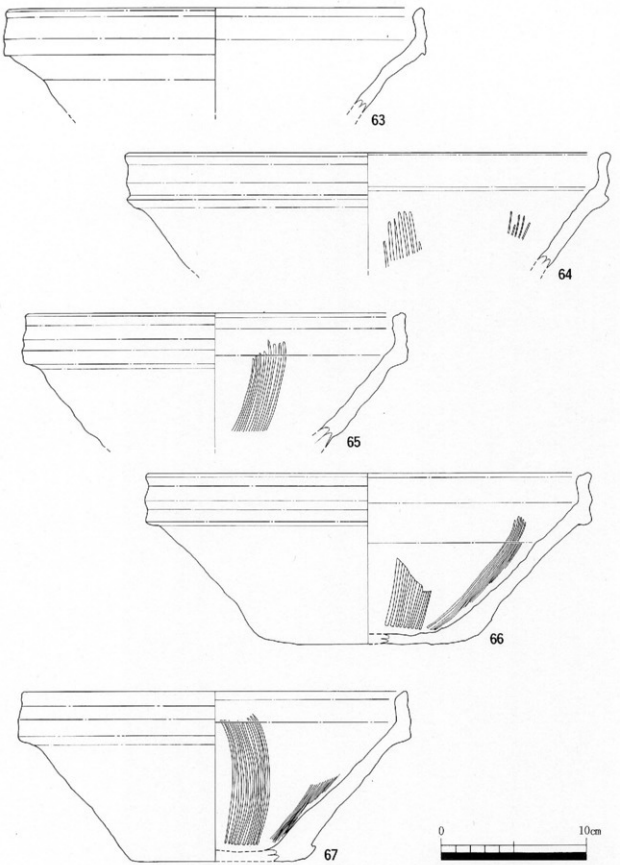
第26図　出土遺物実測図（２）



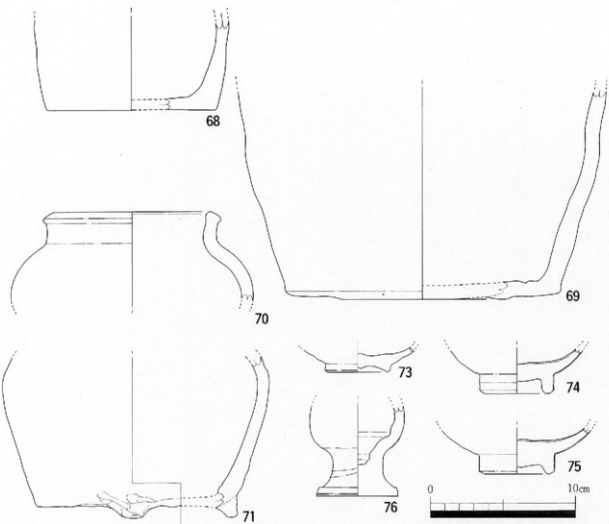
第27図　出土遺物実測図（3）



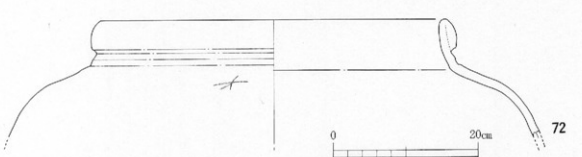
第28図　出土遺物実測図（4）



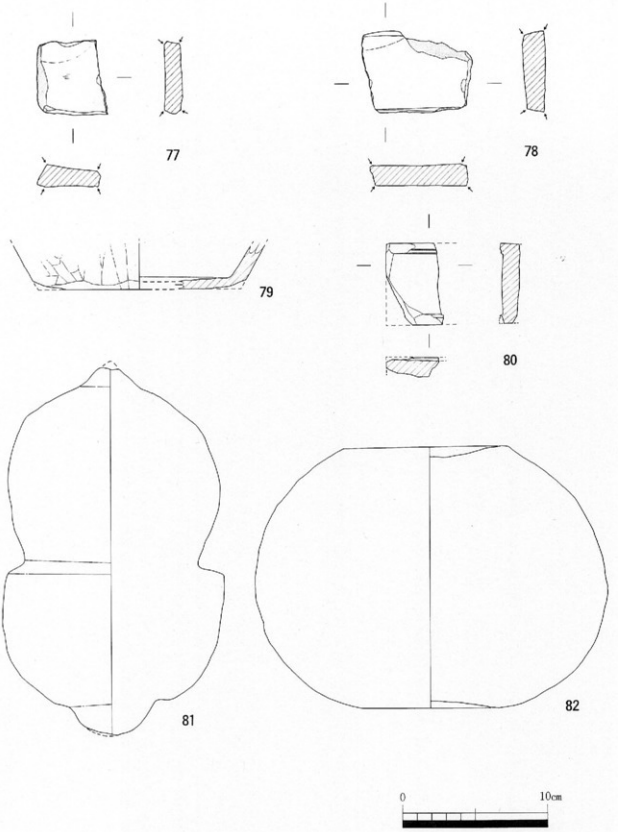
第29図　出土遺物実測図（5）



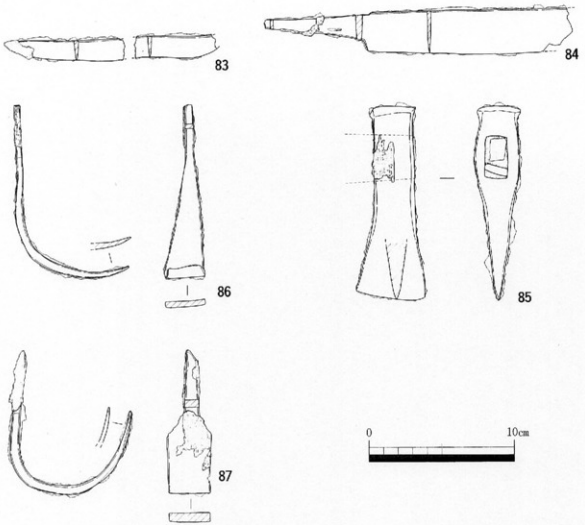
第30図　出土遺物実測図（6）



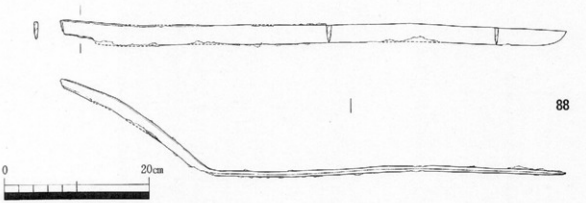
第31図　出土遺物実測図（7）



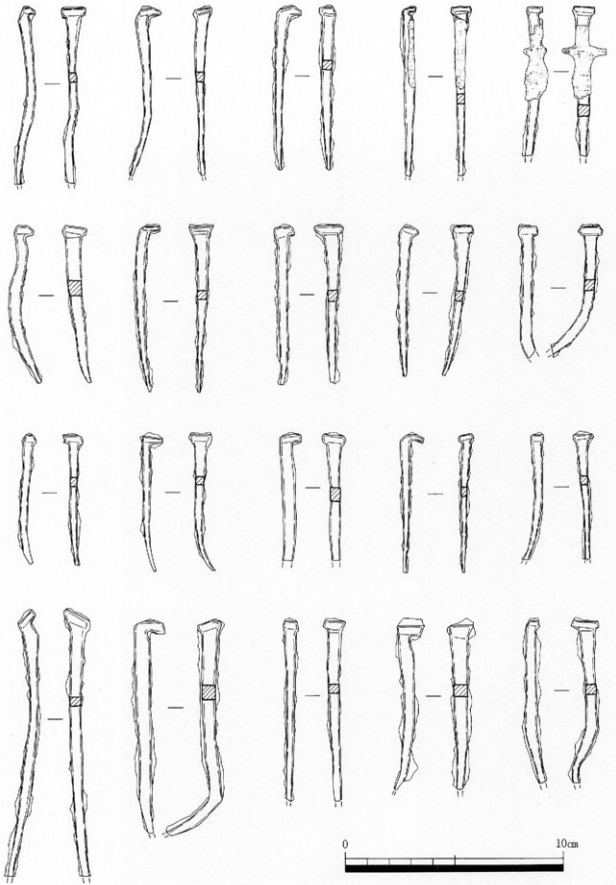
第32図　出土遺物実測図（８）



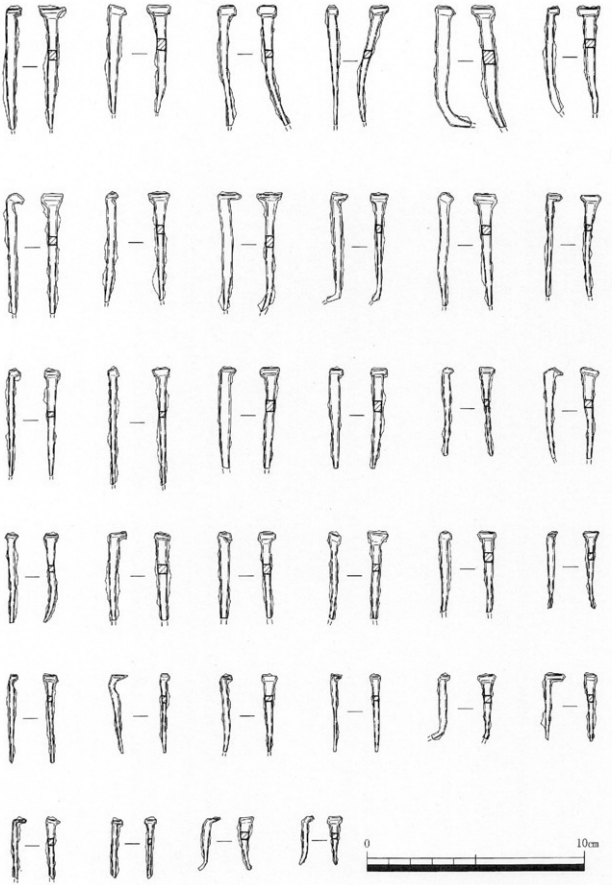
第33図　出土遺物実測図（9）



第34図　出土遺物実測図（10）



第35図　出土遺物実測図（11）



第36図　出土遺物実測図（12）

1．開元通寶

2．淳化元寶

3．祥符元寶

4．天禧通寶

5．天聖元寶

6．景祐元寶

7．皇宋通寶

8．治平元寶

9．熙寧元寶

10．元豐通寶

11．元祐通寶

12．紹聖元寶

13．紹聖元寶

14．聖宋元寶

15．淳熙元寶

16．洪武通寶

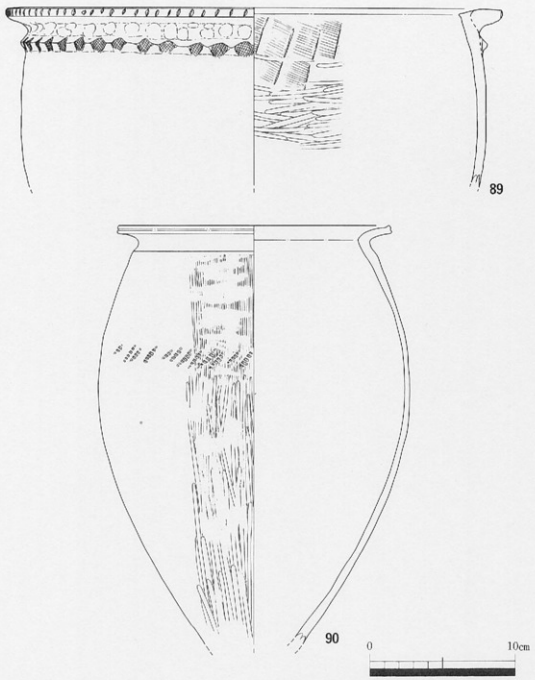
17．永樂通寶

18．朝鮮通寶

19．□□□寶

一銭

第37図　出土古銭拓影（1：1）



第38図　弥生土器実測図

Ⅴ　ま　と　め

本城跡は，通称極楽寺山（標高693m）から，西に派生した丘陵の先端部に築かれたもので，標高51mを測る。今回の発掘調査により，８つの郭と３つの堀切，１つの縦堀を確認し，郭内からは，礎石建物跡１か所，掘立柱建物跡４か所，櫓列１か所などを検出した。

本城跡の郭配置は，輪郭型[注1]というべきもので，頂上部に第１郭～第３郭があり，これを四方からとり囲むように，第４郭～第７郭が配されている。また，第４郭の南側下方には，堀切で隔てられ，第８郭が配されている。第４郭～第７郭は，各々連絡可能な位置にあり，その規模から，第４郭と第６郭が南北の要になる郭と考えられる。また，第８郭は，他の郭から独立しており，捨郭的に使用されたと推定される。

建物跡は，第３郭・第５郭・第６郭から検出され，とくに第３郭からは，礎石建物跡を含む３つの建物跡が検出されている。第３郭の北端には，櫓列もみられることから，この郭がとくに重要視されていたことがわかる。

次に，本城跡の意識する方向について考えてみよう。まず，本城跡の主軸は，郭の形状及び配置から南西－北東方向と考えられる。ついで，本城跡は，郭の位置関係，郭内の遺構検出状況などから，北東側の防禦に重点を置いていると考えられる。また，後述するように南西側の防禦機能が低いこと，石内川ぞいに南下する旧山陽道を石内方面まで広くみわたせる位置にあることなどから，本城跡は，北東側を意識して築かれたものと考えられる。

第４郭の南西側には，ゆるやかな尾根がつづいており，この地点に２つの堀切を設けている。しかし，これらは規模が小さく，第４郭との比高差も小さい。さらに，第４郭は比較的大形の郭であるが，遺構としては建物跡１か所が確認されたのみで有効な防禦施設がみあたらない。第４郭の南側には，第８郭を配しているが，その規模・構造などから，あまり効果的でないと推定される。以上のことから，本城跡は，後方の防禦機能が低いと考えられよう。

さて，本城跡の西側に隣接して向山城跡・茶臼山城跡があり，これらの南側には，谷を隔てて月見城跡がある。向山城跡・茶臼山城跡は，尾根つづきにあり，郭配置からみて，一城として把握するのが自然と考えられる。このことは，『芸藩通志』には，茶臼山城跡しか記載されていない[注2]ことからも首肯できよう。この城は，北東側の一部が後世の地形変更を受けており，この部分に郭の存在した可能性も考えられるが，現地形からみれば，堀切・縦堀により４つの郭群に分けられる。標高114mを測る最高所の四方にも郭を配しているが，基本的には，最高所から尾根づたいに東西方向に郭を配したもので，複連郭型というべきものである。

向山・茶臼山城跡は，本城跡の後方，しかも同一尾根上に築かれている。前述のように，本城跡は後方の防御機能が低いが，向山・茶臼山城跡と連携することによって，これを飛躍的に増大することができる。このようにみると，発掘調査が行われていないため断定はできないが，向山・茶臼山城跡は，本城跡ときわめて密接な関係にあったと考えるのが妥当であろう。

なお，月見城跡については，きわめて小規模なものであり，その位置関係から，この２城に関連するものと考えられよう。

次に，本城跡の使用時期について，遺物・文献の面から検討してみよう。

まず，遺物をみると，山城に伴うと考えられる出土遺物のうち，年代を比定できるもののほとん

どは，15世紀後半から16世紀と考えられる備前焼である。これらは，第3郭・第6郭を中心に比較的広い範囲から出土している。このことから，本城跡の使用時期は15世紀後半から16世紀代を中心とすると推定されよう。

なお，本城跡の第3郭内から，12・13世紀から14世紀前半に比定される遺物が出土している。したがって，この時期にも本城跡の頂上部で何らかの営みのあったことが推定されよう。

次に，文献からみると，既述のように厳島神主家と武田氏の対立に，大内氏・細川氏が加わり，安芸国内で大規模な武力衝突が始まるのは，15世紀中頃である。それ以後，安芸国内は，毛利氏の統一まで武力衝突がくり返される。

また，『芸藩通志』には，「池田一にしげ城と称す」と記載されているのみであるが[注3]，保井田村と倉重村の『国郡志下調書出帳』の旧家の条にはもっと詳しい記事がある。記事の内容には若干の相違があるが，①永禄7年（1564）に高木氏が池田城を与えられたこと②毛利氏の防長移封に伴い高木氏も同行したが，一族のうち当地に留まったもののあったことの2点は共通している。このことから，本城跡は16世紀後半から16世紀末にかけて，毛利氏配下の高木氏が居城したことが推定される。

安芸国内の歴史的背景及び上記の記事から，本城跡は，15世紀後半から16世紀末にかけて使用された可能性が強い。

以上のように遺物と文献からの検討結果がほぼ一致することから，本城跡の使用時期は15世紀後半から16世紀に比定できよう。

また，本城跡は，北東側－武田氏の本拠金山城の方向－を意識して築かれていることから，武田氏と対抗するために厳島神主家及びその配下の神領衆によって築かれた可能性が強い。このことは，本城跡周辺に五日市（光明寺城）の宍戸氏[注4]，坪井の新里氏[注5]という有力神領衆がおり，その他にも，地名から寺地氏，三宅氏，高井氏などの神領衆の存在がうかがわれることからも裏付けられよう。

なお，本城跡の城主として，巷間伝えられる池田教正については，それを裏付けるだけの根拠はみあたらないようである。

最後に，本城跡と周辺の山城との関係をみよう。本城跡の北東側には，多くの山城が築かれているが，南側は，きわめて小規模な月見城跡を除けば，光明寺城跡・桜尾城跡などの海岸ぞいに築かれたものがみられるだけである。本城跡及び北東側の山城は，内陸交通の主要道であった旧山陽道を意識して築かれたものと考えられ，本城跡は，これら一連の山城の南端に位置する。一方，南側の海岸ぞいに築かれた山城は，内海水運の航路を意識したものと考えられる。

内海水運は，古代から重要視されていたが，中世以降，次第に商品の輸送量が増大し，それに伴って，海上交通の要衝に多くの港湾都市が発達した。安芸国では，厳島をはじめとして，廿日市・五日市・草津などが港湾都市として繁栄した。これらの地には，前述の桜尾城・光明寺城や草津城などの水軍城と考えられる山城が築かれている[注6]。これらの山城は，厳島神主家や宍戸氏・羽仁氏などの有力な神領衆が城主として知られる。厳島神主家は，廿日市の港に出入する商業に課税していたと考えられており[注7]，こうした城の配置からも，社領を押領され収入減となっていた厳島神主家が内海交通による商業の発達に注目していたことがうかがえよう。

本城跡は，北東から旧山陽道ぞいに五日市・廿日市方面に侵入する軍勢に対する最後の砦であり，かつ水軍城の築かれた港湾都市の背後を押える地点にあり，軍事・経済・交通上きわめて重要

な依置を占める山城であったといえよう。

注

（1） 以下，山城の型式分類は，広島市教育委員会の試案による
広島市教育委員会　広島市の文化財第20集『山城』　1982　参照

（2），（3） 『芸藩通志』巻55

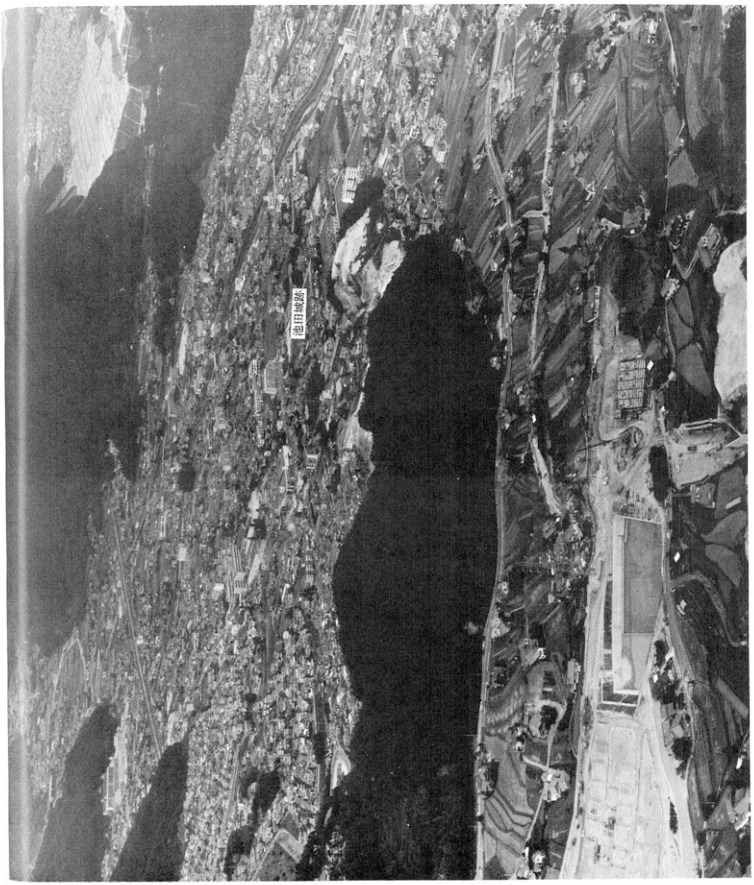
（4） 「房顕覚書」
『芸藩通志』巻55

（5） 『萩藩閥閲録』巻69
『芸藩通志』巻55

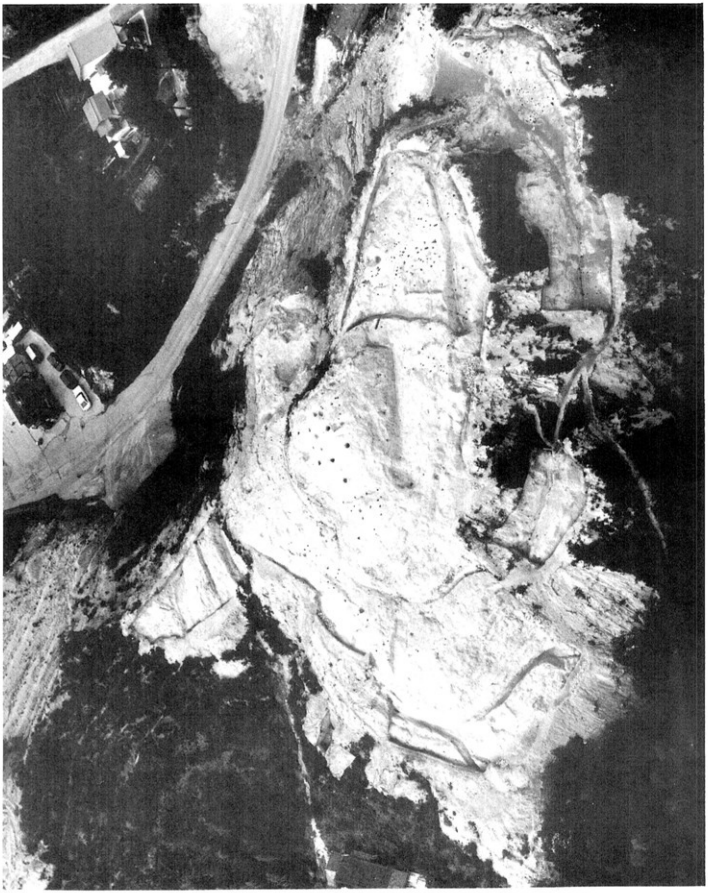
（6） 広島県教育委員会　『瀬戸内水軍』　1975
広島市教育委員会　広島市の文化財第24集『草津城跡発掘調査報告』　1983

（7） 秋山伸隆　「戦国大名毛利氏の流通支配の性格」　戦国大名論集6『中国大名の研究』所収　1983　吉川弘文館

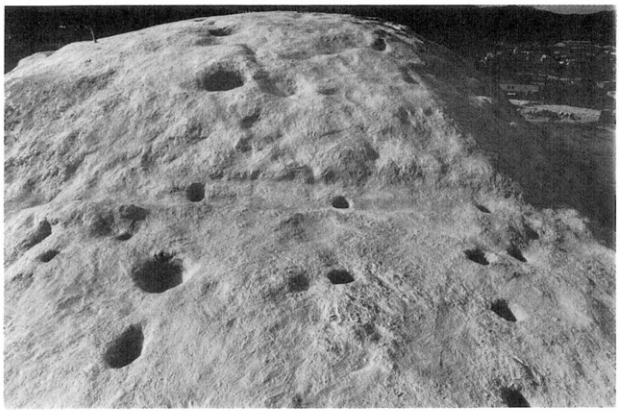
図　　版



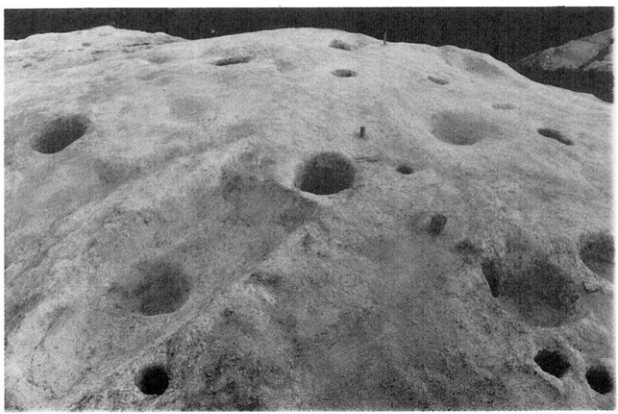
池田城跡遠景（上空西から）



池田城跡全景（上空東から）

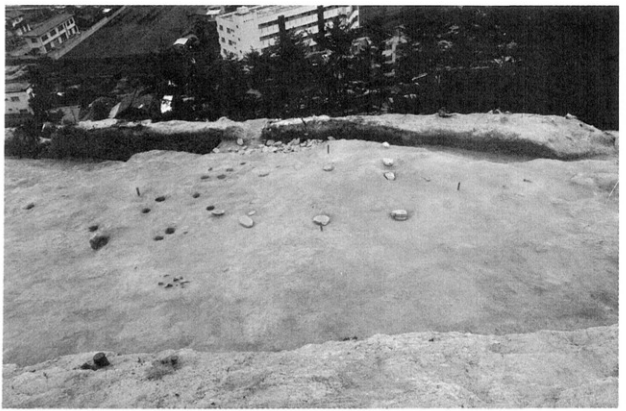


a．第1郭・第2郭（南から）



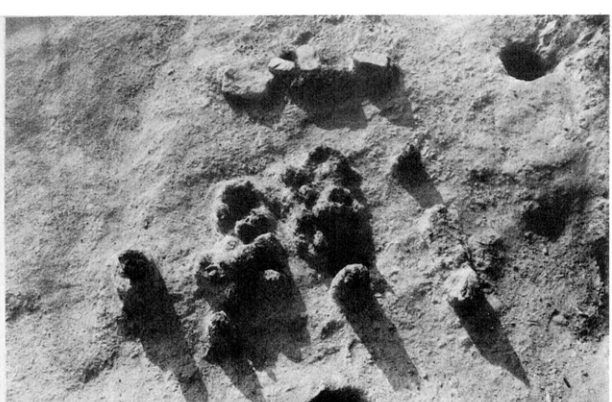
b．第1郭ピット群（北から）

a．第２郭礫群（南から）



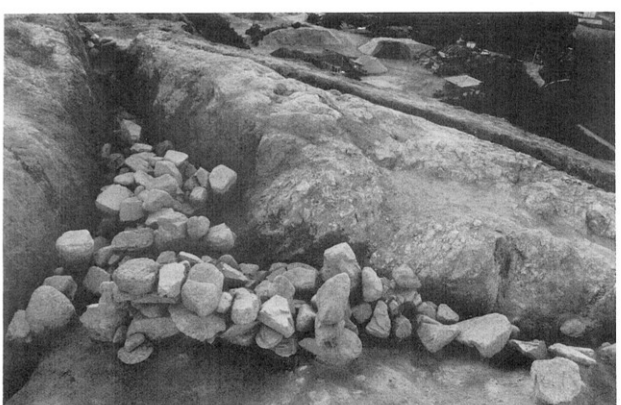
b．第３郭１の段（西から）

a．第１号建物跡（東から）

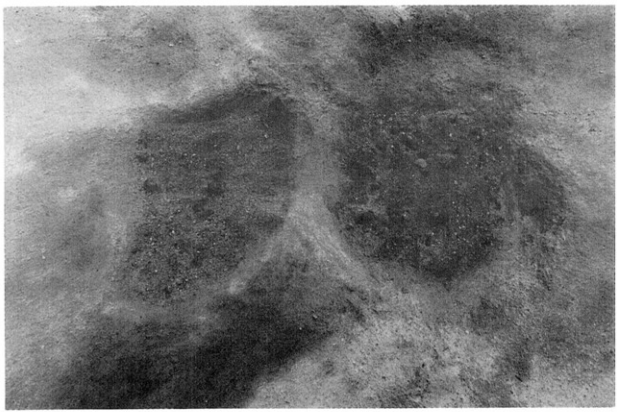


b．鉄滓出土状態（東から）

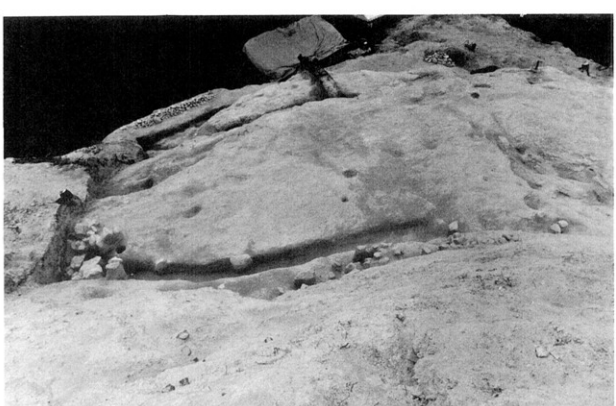
a．第３郭２の段（南西から）



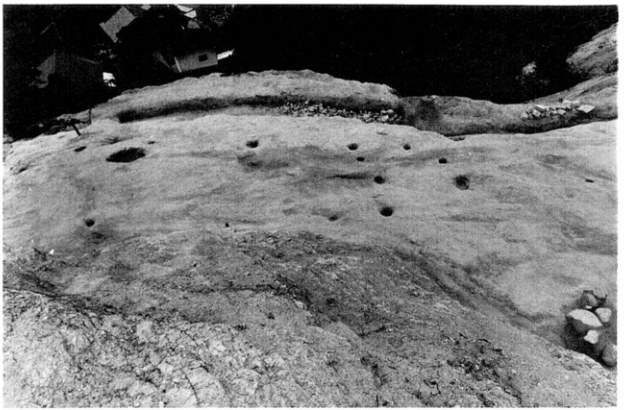
b．同上礫群（北東から）



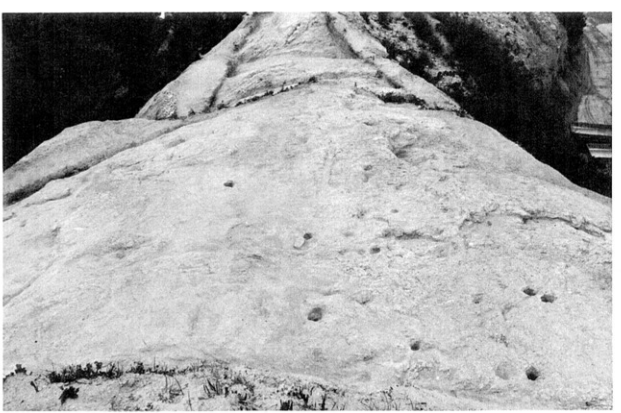
a．ピット内炭化物・鉄滓出土状態(北から)



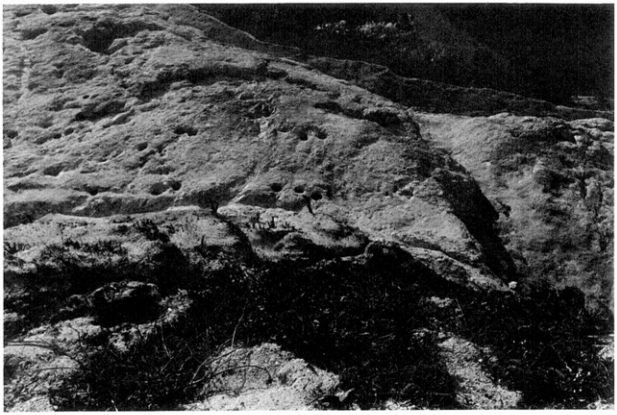
b．第4郭東側（北西から）



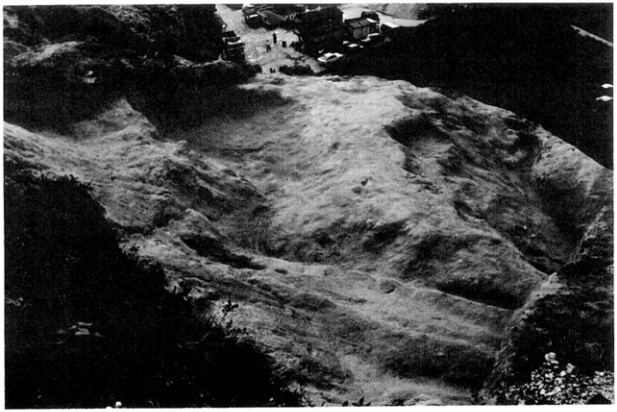
a．第４郭中央（北から）



b．第４郭西側（北東から）

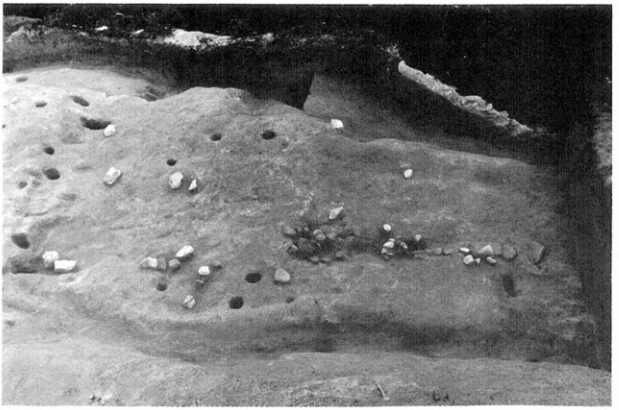


a．第4号建物跡及び縦堀（東から）

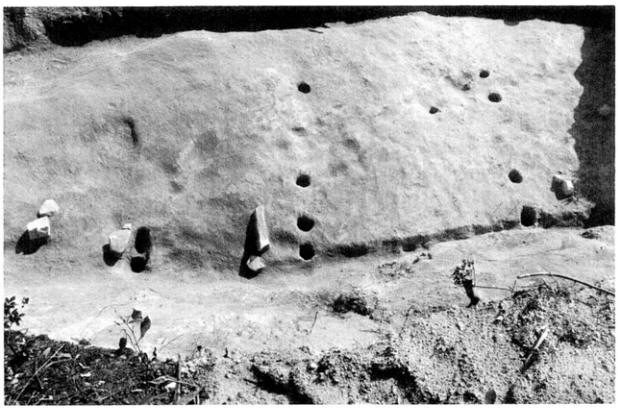


b．第5郭（北東から）

a．第６郭北側（南東から）



b．第６郭中央（南西から）

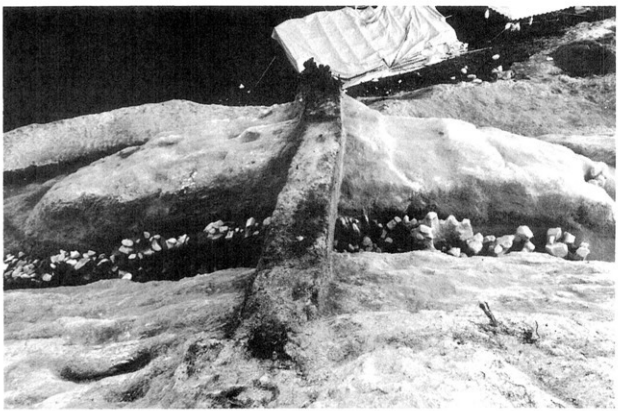


a．第6郭南側（西から）

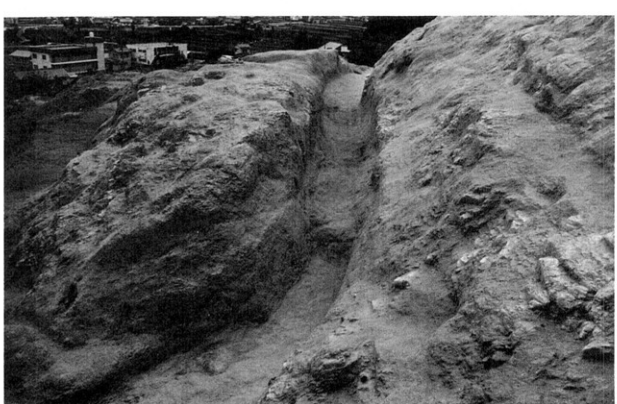
b．配石遺構（東から）

a．第７郭（北から）

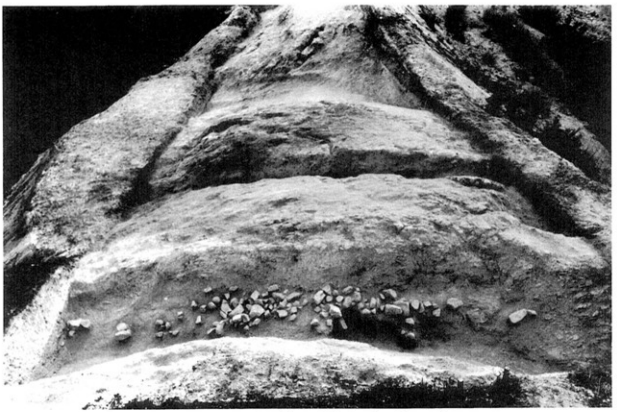
b．第４郭南側斜面石列（北西から）



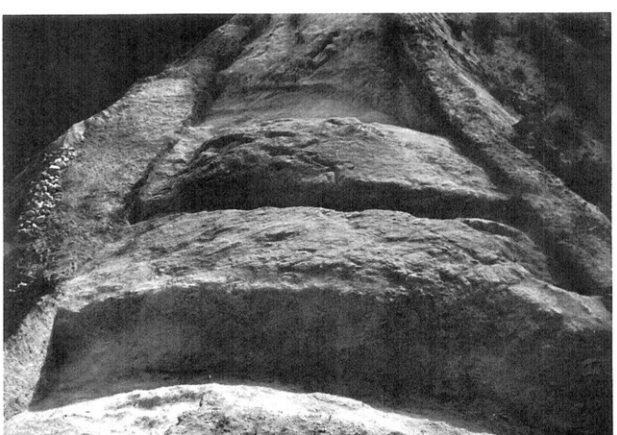
a．第８郭及び第３号堀切(北西から)



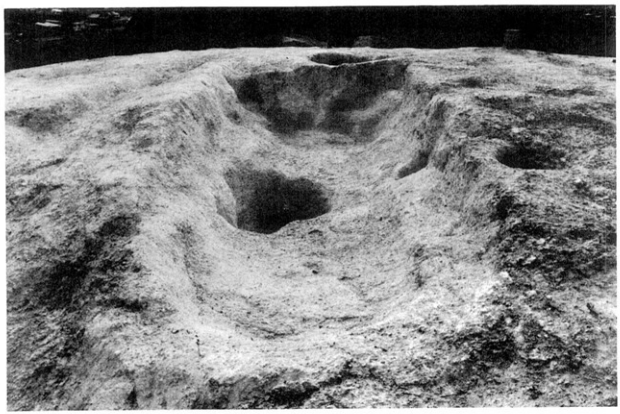
b．同上（完掘後，北東から）



a．第１号・第２号堀切（北東から）

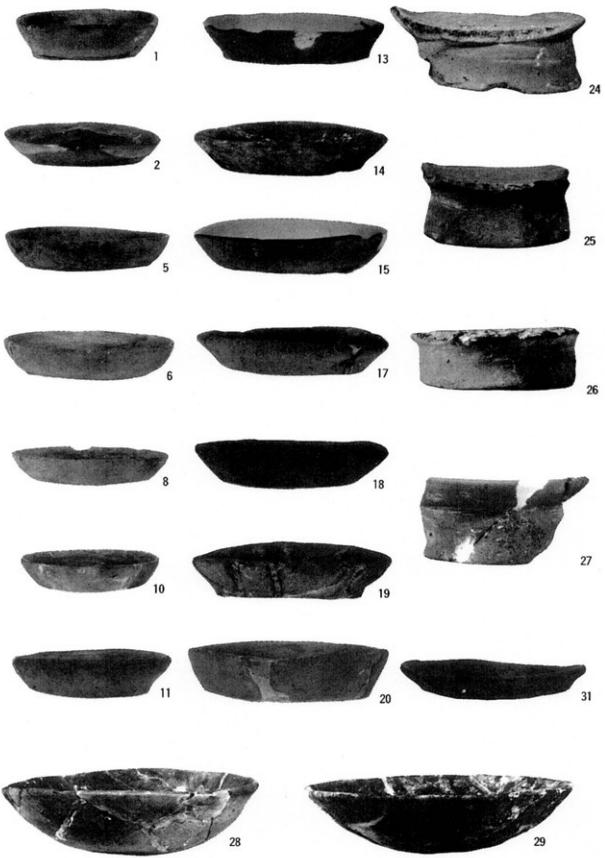


b．同上（完掘後）

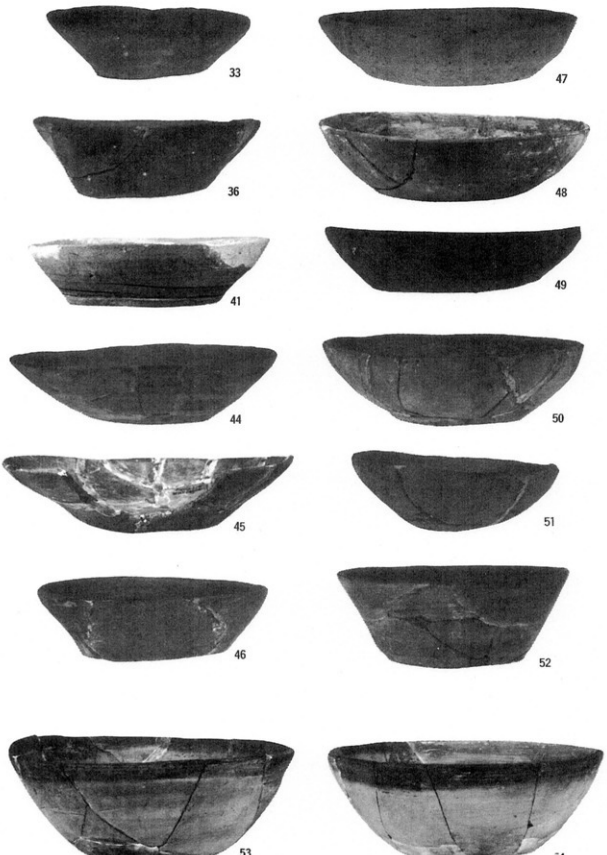


a．第1号土壙（東から）

b．古墓（北東から）



出 土 遺 物 (1) ＜1：2＞

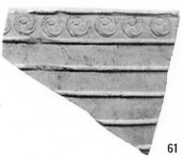


出 土 遺 物 (2) ＜1：2＞

59

57

58


61

56

60

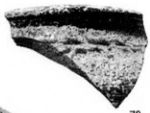
出 土 遺 物 (3) ＜1：3＞

66

65

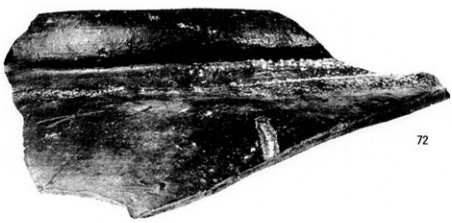
67

63

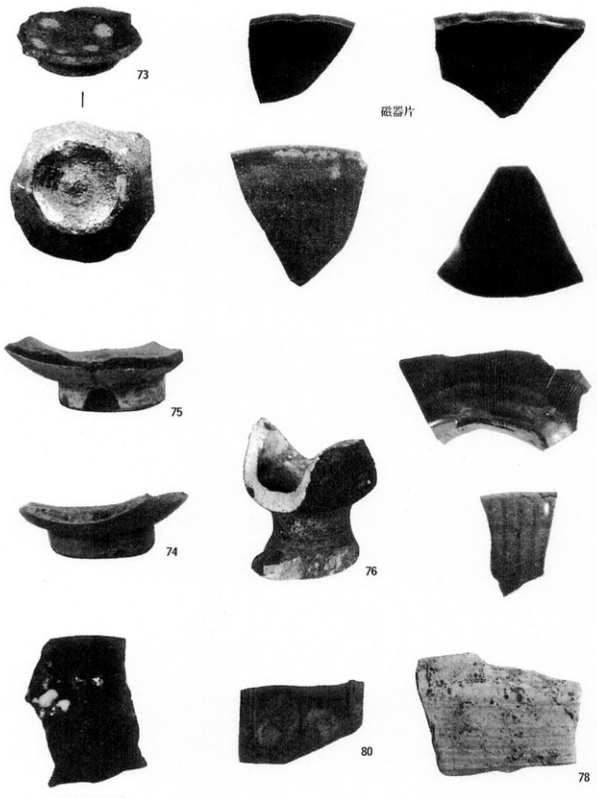

70

71

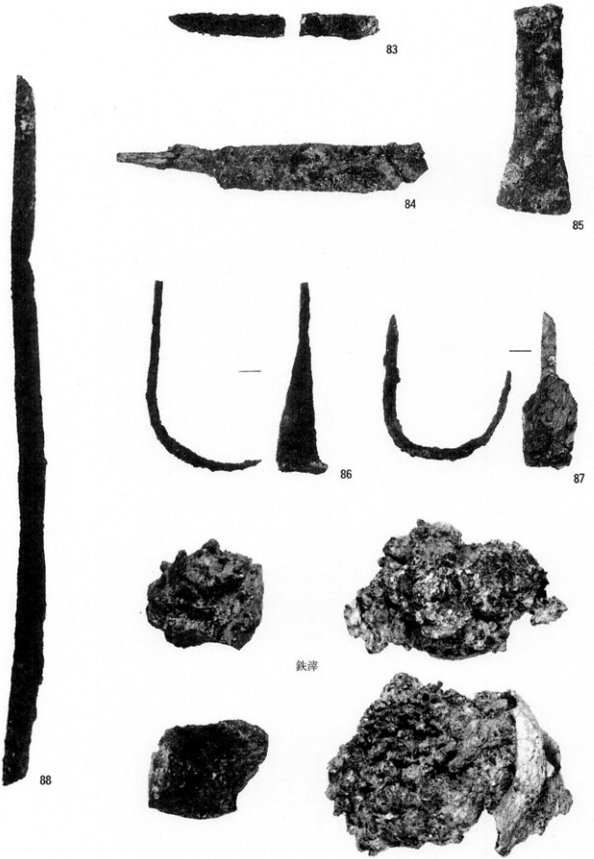
64


72

出 土 遺 物 (4) ＜1：3＞

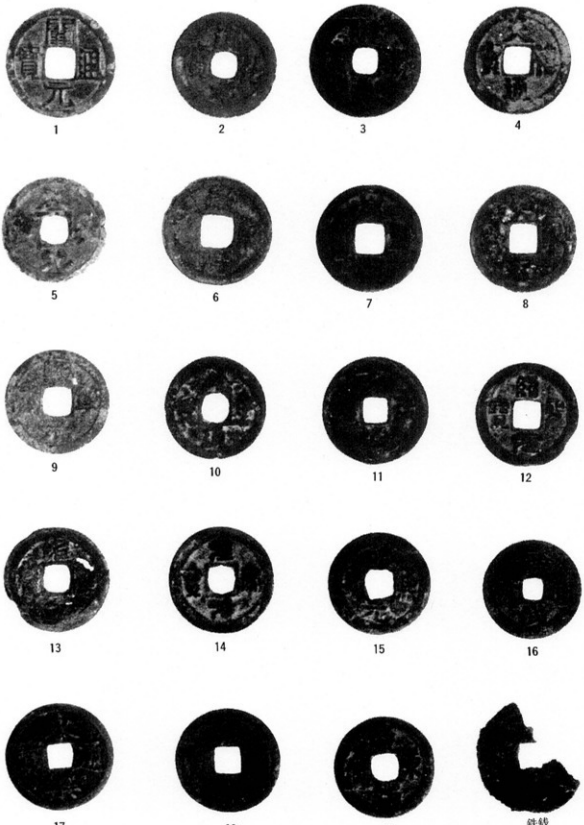


出 土 遺 物 (5) ＜1：2＞



出 土 遺 物 (6) ＜1：3＞ **88**は ＜1：4.5＞

出 土 遺 物 (7) ＜1：2＞



出 土 古 銭 ＜1：1＞

弥 生 土 器 <1：2>

登録番号	広文4－85－193
名　　称	広島市の文化財　第35集 広島市佐伯区五日市町所在 池田城跡発掘調査報告
編集・発行	広島市教育委員会 （社会教育部管理課） 広島市中区国泰寺町一丁目4番21号 （〒730）TEL（082）245－2111㈹
発行年月日	1986年3月
印　　刷	㈲創　元　社